天理大学公開講座

第6号

2009年度／2010年度

TENRI UNIVERSITY

目　　次

平成21年度

天理大学公開講座（共催：天理市教育委員会）

第１回　社会学から見た子どもと教育の現在　石飛 和彦・・・・・・・・・3
第２回　感性を育む　－からだが語る子どものこころ－　塚本 順子・・・・・・・・・4
第３回　ブラジルの子ども事情　北森 絵里・・・・・・・・・5
第４回　臨床心理学からみた現代のこども　浪花 佑典、松田 拓也　・・6
第５回　子どもの「こころ」の育ちについて　仲　　淳・・・・・・・・・7

ヨーロッパ学・アメリカ学への招待（共催：奈良新聞社）

第１回　アメリカ式説得コミュニケーションの光と影　木下 民生・・・・・・・・・8
第２回　シェイクスピアの饗宴　－英国ルネサンスのバンケットを楽しむ－　山本 真司・・・・・・・・・9
第３回　「ベルリンの壁」崩壊から20年　－東西の格差と「心の壁」－　中祢 勝美・・・・・・・・・10
第４回　国王封印状　－フランス絶対王政下のある真実－　田中 寛一・・・・・・・・・11
第５回　「書評」で読み解くスペイン・ラテンアメリカ文学　片倉 充造・・・・・・・・・12

「大和学」への招待（共催：奈良新聞社）

第１回　近代大和の出産習俗　－お産が病気ではなかった時代－　安井 眞奈美・・・・・・・14
第２回　大和の木地屋　森本 仙介・・・・・・・・・15
第３回　大和の春の民俗行事　－卯月八日の天道花を中心に－　飯島 吉晴・・・・・・・・・16
第４回　大和の伝説　－若草山と理源大師の大蛇退治－　齊藤　純・・・・・・・・・18
第５回　大和の麻・木綿・きもの　酒野 晶子・・・・・・・・・19

教職員のための夏の公開講座

中国語発音教授法　中川 裕三・・・・・・・・・20
成長期に特徴的なスポーツ外傷・障害の基礎知識　寺田 和史・・・・・・・・・22

公開講座フェスタ 2009

体育とスポーツについて　深見 英一郎・・・・・・・24

奈良まほろば館講座

柿本人麻呂　－山辺道をめぐって－　川島 二郎・・・・・・・・・25

目　　次

平成22年度

天理大学公開講座（共催：天理市教育委員会）

第１回　ストレスと上手につきあうためには　－臨床心理学の立場から－　仲　　淳・・・・・・・・・26
第２回　ストレス対処法としての運動・スポーツ　西田　円・・・・・・・・・27
第３回　現代中国社会とストレス　関本 克良・・・・・・・・・28
　　－中国の地域精神保健サービスの現状と課題－
第４回　困難を超えて生きる　－障害者の生活体験から学ぶ－　山田　明・・・・・・・・・29
第５回　生きる意味を見いだす　－臨床人間学の視点から－　澤井 義次・・・・・・・・・31

外国語への招待（共催：奈良新聞社）

第１回　オーストラリアの文化多元主義　櫟本 崇恵・・・・・・・・・32
　　－言語政策と個人のアイデンティティの動揺－
第２回　ことわざで学ぶ韓国・朝鮮語　－先人たちの健康への気遣い－　松尾　勇・・・・・・・・・34
第３回　タイの十二支　－動物を通して知ることばと文化－　野津 幸治・・・・・・・・・35
第４回　日本にいる二人の幸せな外国人　B.U. カルステン ・・・・・36
　　－さまざまな文化を越えて一つの文化へ－　O. ジャメ
第５回　言葉の翻訳、思想の伝達　－きりしたん教理書から BUSHIDO まで－　東馬場 郁生・・・・・・・38

「大和学」への招待（共催：奈良新聞社）

第１回　赤人の行幸讃歌　川島 二郎・・・・・・・・・39
第２回　則天文字は日本に伝わったか　山本 忠尚・・・・・・・・・40
第３回　平城京で暮らしていた人々　岩宮 隆司・・・・・・・・・43
第４回　「なら」の文学を意識した次代の者たち　仁尾 雅信・・・・・・・・・44
第５回　都にやってきたアザラシたち　－古代日本の海獣皮の利用－　藤田 明良・・・・・・・・・45

教職員のための夏の公開講座

算数・数学であそぼう！　上田 喜彦・・・・・・・・・47
これからのヘルスプランニング　村上 佳司・・・・・・・・・48

公開講座フェスタ 2010

縦縞の長裙と男装の麗人　－高松塚の人物群像をめぐって－　山本 忠尚・・・・・・・・・49

生駒市民カレッジ

スポーツとストレス　やる気を促すコーチング　村上 佳司・・・・・・・・・51
健康的な生活に向けた生涯スポーツへの参加　備前 嘉文・・・・・・・・・52

第１回　平成 21 年６月６日
社会学から見た子どもと教育の現在

人間学部人間関係学科 准教授　石飛 和彦

虐待、犯罪、いじめ、学力低下…いま、子どもたちの世界はどうなっているのか？こうした疑問に対して、データや資料を参考にしながら、社会学という視点から、子どもと教育の現在と未来を見通してみること、これが、今回の講義の目的である。それに際して、「10 冊の新書本＋α で見る子どもと教育の現在」と銘打って、比較的手に入りやすい新書本およびネット上で無料公開されている論文、公的資料、公式統計を紹介しながら話を進めた。この方針は、今回の講義の内容とも深くかかわっている。というのも、冒頭にあげた様々な「問題」に疑問を呈することが今回の講義のスタンスだからである。つまり、子どもや教育に関してこの社会で語られていること（当日は用いなかった術語を使うならば、「言説 discourse」）そのままを鵜呑みにする」のではなく、まさに「元のデータに当たってみてから判断すること」が重要だ、というのが、社会学からの提案なのだ。

たとえば、「児童虐待」が激増している、という報道は、児童相談所等の「相談処理件数」が激増（たとえば「10 年で 20 倍以上に！」）という数値を根拠になされているが、いうまでもなく虐待の「実数」がそれだけ短期間で急激に増加したというわけではない。「虐待」が社会問題化し、人々の関心が「虐待」に集中し、虐待対策の制度的基盤が整備されたことから、「相談処理」の件数が増加し、またそのニュースがさらに人々の関心（とくに母親たちの不安）をかきたててよりいっそう「相談」を増加させた、という構図が見て取れる。この「虐待」問題はまた往々にして、「家族」の心理的コミュニケーションの問題として描き出されもするが、そうした構図が描かれることで、より直接的で大きな要因である経済（貧困）問題が隠蔽される。私たちの誰にでも起こりうる「こころの問題」としての「虐待」」というイメージの影で、実際に多く虐待が発生し対策を必要としている社会層の存在そのものが隠蔽されてしまうことにもつながるのである。

同様に、「少年犯罪」も、また「子ども」が被害者になる犯罪も、社会的なイメージとしては増加しているように感じられており、そのためにまた教育や家族や子どもたちへの締め付けが「規律」「道徳」といった言葉で声高に語られもするし、また社会全体のセキュリティ強化（監視カメラの設置など）の大義名分ともなっている。しかし、これもデータを見るならば、「少年犯罪」も「子ども」が被害者になる犯罪も、実数としてはむしろ減少している。これも、社会的な関心の集中とそれにともなうメディアの扱いの変化によるところが大きいのである。

同様にまた「いじめ」も、データ的にはほぼ恒常的に減少し続けている。ただし、メディアに取り上げられるような印象的な「事件」が起こったとき、またそれと連動して文部科学省が統計を取る際の「いじめの定義」を（緩く）改変したときに、「いじめ」の「発生（認知）件数」が、爆発的に吊り上げられる、という仕組みである。そのようにして「いじめ」への社会的関心は強化されるが、そもそも 80 年代前半に「いじめ」が最初に社会問題化される前には、同様の学校内トラブルは「非行」「校内暴力」という枠組で捉えられていた。そこからの「いじめ」枠組への転換は、いわば「善悪」の論理から「ケア」の論理へという、教育の論理の大きな変化を表していると見ることもできる。

以上をふまえ、社会学の視点から子どもと教育の現在を考えるためには、①格差と社会構造の変化　②子ども観、家族観、教育観の変化　③「心理主義化」　④メディアの変化と「セキュリティ意識」の変化、といった点に注目する必要がある、と整理し、そのためにも常に「元のデータ・資料」にあたることを心がける必要がある、と結論した。

第２回　平成 21 年６月 13 日
感性を育む　ーからだが語る子どものこころー

体育学部体育学科 准教授　塚本 順子

子どもを取り巻く社会的状況や生活環境は昔に比べ大きく変化したといわれる。様々な状況に対面しながら今を生きていくことが、子どもたちや大人たちに求められている。色々な人の中でより良く生きていくために、人と人、自分自身、社会全体の中でうまく対話できることが必要になる。つまり、自己や他者とのインタラクティブなコミュニケーションがうまくできたなら、困難な状況をうまく乗り越えることができるかもしれない。

私は舞踊学、舞踊教育学を専門としていることから、身体表現やノンバーバルコミュニケーションを対象に、その現象や事象を研究している。そういった視点から考えると、時にからだは多くのことを語り伝えていることがあり、そのことについてはすでに自明のことだと私たちは気づいている。動作や表情に心のうちの感情が表れていることは、私たちが使う言葉の慣用句にも表れている。例えば、からだの一部を含む言葉として、「歯がゆい」「歯が立たない」「首を長くして待つ」「目に入れても痛くないほどかわいい」「目からうろこが落ちる」「足が出る」など枚挙に暇がない。そうして自然と表れた心のうちをお互いが読み取り推し量りながら気遣い、共に生きてきたのが私たちの生活文化であったと思う。

しかし、最近では様々に状況が変化する中で、子どもや大人の中でもキレルというような感情のコントロールができなかったり、感情の読み違いからトラブルになったりすることが社会問題となっている。「あの人は KY（場の空気が読めない）だね。」という言葉までささやかれている。

ではここで、言葉だけでなくからだから発せられるお互いの心のうちを読み解くそのキーの一つとしての感性について考えてみようと思う。

感性とは、美や善などの評価判断に関する印象の内包的な意味を知覚する能力であり、これは非言語的･無意識的･直感的なものだと説明されている。人間が対象に接触する時、対象自体から触発されて何らかの表象を得る。その時の受動的な能力自体が感性であるが、それに対して理性は概念的な思考能力を指しているといい、こうした点で感性は理性と対比される。

中村は『理性は「感性相互の形式」であるが感性は身体的・生理的感覚を基調にした能動的な思考による理性の働きを潜在的に支えているものである』としている。想像力・構想力・心象・イメージとよばれるものは、いずれも感性と深く関係しており、感性は情念（passion）、情動（emotion）、感情（sentiment）、感受動（affection）を働かせる可能性のことであるが、これは理性的な教育の行為を潜在的な局面で支えるものとして重要視されている。

受動する、知覚する感覚（視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚）の中では視覚が優位だといわれているが、具体的にはどのような感受が起こるのだろうか。例えば、夏にセミの声を聞いたり、山の夏のにおいを感じて、父親と子どもの頃に登った記憶を思い出したりする。そのことをもとに音楽や詩を書いたりと、新しい創造へつながっていくことがあるが、これはからだを通し体験し感じ取った身体的知によるものであるといわれている。まず、本物にからだごと触れてみること、それが子どもの感性を豊かにしてくれるのである。

それでは子どもの心はどこにあるのか？近年、脳科学の分野が取りざたされているが、その中でも澤口は、前頭連合野の働きの重要性を説明している。８歳ぐらいまでが脳の発達の重要な時期であり、この時期の環境が貧しいと後で取り返すのが困難だともいわれている。しかし、何も科学的な最先端の新しい方法だけがそれを可能にするのではなく、むしろ「昔に帰ること」をその著書の中では提唱している。

何が変わり、何が変わらないのか、何を残し伝えていくべきなのか、今を生きる私たち自身がしっかりと感じ考えながら、これから先を見据え、お互いに共に生きることを積み重ねていくことが大切だと考える。

『共通感覚論』　中村雄二郎　岩波書店
『幼児教育と脳』　澤口俊之　文春新書

第３回　平成 21 年６月 20 日
ブラジルの子ども事情

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 准教授　北森 絵里

どんな社会でも子どもは大切にされる。ブラジルにおいても、子どもは､学校に通い親や周囲の大人から愛されている。しかし、一方では、ブラジルが児童労働とストリートチルドレンの問題を抱えている国であるということは、政府も世論も認めている。ブラジル社会は、貧富の格差が著しい「格差社会」であり、これらの児童労働やストリートチルドレンの問題は、「貧」の側の問題として捉えられている。したがって、「貧困」がこれらの問題の要因の一つであると考えられている。つまり、子どもは、家庭が貧しいから家計を助けるために働き、また「貧しさ」が大人に見捨てられ路上に生きる子どもを生み出すことになる。

このような問題を抱えている子どもは一握りであり、スラム街の子どもの大半は、学校に通い、周囲の大人からの愛情を十分受けて暮らしており、意味なく働いていたり路上に居たりするわけではない。

それでは、なぜ、働く子どもが多いのだろうか。それには彼らの価値観が大きく関わっているようである。実際に働いている子どもとその親（大人）に、子どもが働くことについてどのように思うかを尋ねてみると、次のような答えが返ってくる。子どもたちは､「家計を助けるため」「僕はお母さんを助けなくちゃならない」と言い､親は､「まだ子どもなのに働くなんて大したものだ」「うちの息子は立派だ」と答えた。つまり、働く子どもは、金銭的な理由から働くだけではなく、働くことを通して自分の存在意義と自尊心を獲得し、親や周囲の大人もそれを褒め、働く子どもを「ひとかどの人間」として肯定するという価値観が見て取れるのである。

このような価値観をもっているにも関わらず、路上に居る子どもが減らないのが現状である。ストリートチルドレンに関する行政による調査によれば、面談した 344 人の子どものうち、約 77％の子どもに家があり約 55％の子どもが家族とコンタクトがあると答えている。別の調査によれば、面談した 1,040 人の子どものうち、約 77％が菓子売りや自動車のフロントガラス磨きや靴磨きなどをして働いており、７歳から 11 歳の子どもの 62％が家計を助けている。ブラジルのストリートチルドレンの大半は、「寝食ともに路上で天涯孤独」ではなく、「家も家族もあるが路上に居る」子どもたちであることが指摘されている。

それでは、このような子どもたちが、「路上に居る」理由は何だろうか。彼らの大部分は、親あるいは身近な大人との関係に問題を抱えているようである。たとえば、それは、虐待、育児放棄、性暴力、大人への強い反抗心である。つまり、周囲の大人が子どもを大切にして育てることが出来ないため、子どもは家に居るより路上に出ることを選択すると考えられる。

子どもを大切にするブラジル社会ではあるが、「働く子ども」や「路上に居る」子どもがあとを絶たず、そのような子供たちは、社会からあまり歓迎されず問題視されている。その理由は次のように考えられないだろうか。子どもは本来、親の保護の下で育てられ学校で学ぶものであり、子どもの居場所は、路上ではなく家庭や学校である。にもかかわらず、働く子どもや路上に居る子どもは、そのような本来の子どもの姿に一致しない。すなわち、「逸脱した子ども」なのである。「逸脱している」とみなされる子どもに対して、社会は冷たい。児童労働やストリートチルドレン向けのブラジル政府による対策は、しばしば、貧困世帯に児童手当を支給したり、路上に居る子どもを隔離･収容するといった対症療法的なものになる傾向がある。これらの対策も重要であるが、子どもの労働を善しとする大人の価値観や子どもを家庭から路上に追いやってしまう家庭環境にこそメスを入れない限り、本当の解決を見ることは難しいであろう。

第４回　平成 21 年７月４日
臨床心理学からみた現代のこども

臨床人間学研究科 大学院生　浪花 佑典
臨床人間学研究科 大学院生　松田 拓也

前半は「若者の心に寄り添うためには」と題し、現代の思春期・青年期を生きる子どもたちを、臨床心理学という学問がどのように理解し、彼らの心にどのように関わろうとしているのかについて、日ごろ思春期・青年期の子どもたちと接する機会の多い、臨床心理学を専攻している大学院生という立場からお話ししました。

まず始めに臨床心理学の固有の視座として、相手を理解する場合に相手を客観的に眺めるだけではなく、セラピスト自身の内に生じてくるプロセスにも注目するという点や、個別性を尊重し、週に１回決まった時間に１対１の面接を行うという点などを取り上げ、先駆者である Freud,S. や Jung,C.G. の業績についても紹介しました。

次に現代を生きる若者の諸相として、不登校、ひきこもり、発達障害などのテーマを軸に、現代の思春期・青年期像がどのように変遷してきたかについて考察しました。とりわけ、子どもたちが葛藤に耐えることが困難になっており“心の器”が小さくなってきて、抱えきれない葛藤が反社会的行動に結び付いているということや、一方で完全主義という傾向が強く、周囲に対して常におびえの意識を持ち、何か一つでも思うようにならないことがあると、自己の劣等性に耐えられなくなって、ひきこもりに至ってしまう子どもたちが増えていることなどに注目して考えてみました。

このような問題に対して、関係性を築くということ、及び葛藤を大人が一旦引き受け、子どもが自分で葛藤を抱えられるようになったら、話し合いの中で葛藤を大人が返してあげること、また子どもと一緒に遊ぶことで交流を図ることなどを、臨床心理学的な関わり合いの方策として紹介しました。最後に参加者の皆さんにスクィグルを体験してもらい、見知らぬ人との間にも自然に生じる交流の楽しさや驚きについて実際に味わってもらいました。

後半は、「子どもとの関わり方について」というテーマのもと、現代の児童期・学童期を生きる子どもたちに焦点を当て、講演しました。

まず、遊戯療法について。遊戯療法は子どもに対して用いる心理療法で、遊びを媒介として行うため遊戯療法（play therapy）と呼ばれています。遊びの世界にどのように入っていくのか、また遊びを展開する子どもとどのように関わっていくのか。主に二つのアプローチの方法を取り上げました。

一つは、「子どものありのままの体験を大切にする」こと。子どもの気持ちを汲み取り、子どもと同じ目線に立って、遊びを一緒に体験することで、普段とは違った世界が見えてきます。今一つは、「遊びの表現を言語化する方向で援助する」こと。こちらが適切に言葉に置き換えることで、子どもはその遊びの理解を深め、自分の中に収めていくことができます。本質的に遊びは、非言語的な活動です。言葉では上手く説明ができないその体験に、自分なりの意味づけができるように関わっていく大切さを紹介しました。

次に発達障害を抱える子どもとの関わりについて。特徴としては、大きく三つの事柄が挙げられます。一つは「孤立が常態化している」ということ。関わりが薄いと、関わらずに生きていく術を獲得し、孤立に適応してしまいます。また、そのような子どもは２つ目の特徴として「不安や緊張が高い」といえます。自分でもまだ理解も対処もしきれない世界を生きているため、養育者をはじめ、真の理解者が必要となります。そして、先天性、あるいは徐々に発達に遅れが生じるという問題はあるにせよ、発達障害を抱える子どもは「知覚が過敏」です。これが３つ目の特徴です。どうしても直接的な感覚に頼らざるをえない部分があるために、現実要因の影響を受けやすくなってしまいます。

遊びが発達を促し、その発達によって、より高度な遊びが展開されます。そのような子どもの成長の可能性を引き出し、それを伸ばしていく方向で援助を行うのが、心理臨床家の仕事です。今回はその一端を、大学院生という立場からお話ししました。

第５回　平成21年７月11日
子どもの「こころ」の育ちについて

人間学部総合教育研究センター 講師　仲 淳

心は常に他者とのかかわりあいの中で育まれ、成長していくものです。今回の講座では、子どもの心の発達の道筋と、実際に子どもの成長にかかわっていく時にどのようなことを心がけていけばいいのかということについて、現代的な課題も盛り込んで解説しました。

子どもの心の育ちにかかわっていくときには、どのようなことを考えていけばいいのでしょうか？子どもを５つのイメージにたとえて説明しました。

① 種　：どんな子でもその子なりの花を咲かせて実を結びます。
② 原　石：どんな子も磨けば光る可能性があります。
③ 川の水：子どもは初めはちょろちょろでもいつかは大きなものになるかもしれません。
④ 卵　：子どもを大切に温めていると、いつか殻を破って何者かになる日が来ます。
⑤ 味　噌：子どもは大事に寝かせていると中からじわじわと変わっていくものです。

最近の研究から、ただ寝ているだけに見える赤ちゃんが、実は誕生直後からあらゆる環境に対して対応できるようなたくさんの能力を備えていることが明らかになってきています。本当に「赤ちゃん（子ども）はみんな天才！」なのです。

赤ちゃんは少しずつ自分の感覚と運動能力を使って周りの世界とつながっていきます。そして、いろいろな練習をしながら自分で立ったりしてひとりで動き回ることができるようになるのとほぼ同時に、自分と他者とをつなぐ言葉を獲得していきます（生後１歳前後）。

その後、「自律性（自分でできる力）」や「自発性（自分でやりたいことをやる力）」を発現させていき、学校集団などの中で「勤勉性（やったらできるという気持ち）」や「社会性（人と一緒にやっていく力）」を身につけていくのです。

そして迎える思春期。これまでの育ちのすべてをひっくり返すような問いかけ（「自分って何なんだ？」「親は本当に自分のことを大切に考えてくれているのだろうか？」「大人はみんな敵」など）が子どもの中に湧き上がってきて、時に激しい反抗期となることがあります。

現代の思春期は10歳位から30代半ばまでと言われており、凶悪犯罪と言われるようなことや、不登校、引きこもりなどの新しい問題が注目されています。しかし、そもそも思春期は荒れたりいろいろなことがあって、大人からすると（実は子ども本人にとっても）訳のわからないことがたくさん起こってくる時期です。子どもである自分が一度死んで大人に生まれ変わるときでもあるので、その過程で暴走が起こってしまうこともあるのです。

いまの子は「キレやすい」とか「心の闇」ということが言われたりするのですが、昔も今も子どもの本質は変わっていません。子どもたちは大人よりも好奇心が旺盛で、携帯やインターネットなどの新しいツールを駆使してより高度なコミュニケーションを図りつつあるようにも思えます。子どもは進化していくべき存在なので、大人から見るとどうしても理解しきれないところがあって、「いまどきの子どもは」と言いたくなるものなのでしょう。

ただ、子どもたちがより人間らしく育っていくためには生身の触れ合いや経験が必要です。現代はいろいろなことが便利になってスピード化していく中で、泥臭い人間関係や思い通りにならないことをじっくりと時間をかけて乗り越えていくことができにくくなってきている可能性があるかもしれません。人間は「人の間」と書くように、本来皆いろいろ失敗しながら、お互いに支えあって共に育ちあっていくものなのですが…。

子育てはチャレンジングです。絶対のマニュアルはありません。常に試行錯誤しながら、子どもの力を信じて取り組んでいけば、子どもは子どもなりの成長を遂げてくれるものなのではないでしょうか？子どもの心が育っていくためには、「決めつけない・押しつけない・あきらめない」が大切だと思います。

第１回　平成 21 年５月２日
アメリカ式説得コミュニケーションの光と影

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 教授　木下 民生

今年１月 20 日、第 44 代アメリカ大統領に就任したバラク・オバマ氏は、アフリカ系アメリカ人初の大統領として内外の注目を浴びている。オバマ大統領の演説は希望に満ちており、アメリカ国民を魅了する演説スタイルは爽やかで、その政策内容も明確で説得力がある。歴代のアメリカ大統領の中には、フランクリン・ルーズベルト、ジョン・Ｆ・ケネディ、ロナルド・レーガンなど卓越した演説力でアメリカ国民に感銘を与えた大統領が多くいる。一般的に、アメリカ人は日本人よりもお喋りで雄弁であると言われているが、アメリカでは人前でのスピーチ能力を磨くための教育システムや環境が 19 世紀から整っている。アメリカにおけるスピーチ教育の起源ともいえる古代ギリシャでは、紀元前５世紀後半に「レトリック」（修辞学）と呼ばれる弁論術の原型が形成され、ソフィストによって弁論術が広められた。また、プラトン、ソクラテス、アリストテレスなどが弁論術の理論を構築した。

アメリカ建国後、古代ギリシャの弁論術を基にスピーチ教育が普及し、アメリカではスピーチ・コミュニケーション学という学問領域が確立され、戦後は中学・高校・大学で広範囲にわたって実学的なスピーチ教育が展開されている。幼稚園や小学校低学年の頃からクラスで発表する機会が数多く与えられ､｢パブリック･スピーキング｣や｢ディベート」という科目名で中学・高校から聴衆を前にスピーチや討論の訓練を積んでいるアメリカ人がスピーチ上手であるのもうなずける。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスが提唱した効果的な説得のための３大要素は、エトス（人柄)、パトス（感情的訴え)、ロゴス（論理的訴え）であったが、説得コミュニケーションにおいては、話し口調･ボディランゲージ･視線・カリスマ性などの非言語的要素も重要な役割を果たしている。また、説得を可能にする戦略としては、食事や甘いものを食べながらいい気分のときに相手を説得する「フィーリング・グッド効果」、小さな依頼から大きな依頼へと段階的に説得する「フット・イン・ザ・ドア戦略」、実際よりもかなり大きな依頼をしておいて相手に断られてから、元々の小さな依頼に切り替える「ドア・イン・ザ・フェイス戦略」、「集中的誠意表出作戦」などが挙げられる。

アメリカ大統領が雄弁なのは、こうしたすべてのレトリックの要素や戦略に長けているからであるが、加えてマスメディアを駆使した大規模なイメージ形成、有能なスピーチライターや側近の存在、全国民にテレビやラジオで語りかける直接性、世界一の軍事力と経済力を背景にした力の誇示など多くの要素が複雑に絡み合って、アメリカ国民や世界の人々を説得する上で相乗効果をあげている。

しかし、正当な手段で上手く説得して、相手の態度や行動を変えてしまうのが説得の「光」の側面だとすれば、説得術を悪用して相手をだます説得の「影」の部分にも注目しなければならない。多額の献金目当てのアメリカのテレビ伝道師（誠実で善良なテレビ伝道師も多いが)、カルト宗教のリーダーや幹部の信者獲得作戦に見られる恐怖感を煽る勧誘作戦や情報遮断・洗脳作戦、黒を白とねじ伏せてしまう悪徳弁護士、相手に有無を言わせず商品を無理やり買わせる霊感商法など、アメリカにも日本にも人を騙すネガティブな説得が社会に蔓延している。

相手に簡単に説得されないためには、以下の２つの視点が役に立つ。１つ目は、イラク戦争を正当化して全アメリカ国民と世界を欺いた前アメリカ大統領ジョージ・Ｗ・ブッシュの政治的な策略の実態を冷静に分析し、なぜアメリカ人が簡単に説得されてしまったのかを思い起こすことである。２つ目は、簡単に儲かったり得したりする甘い勧誘に惑わされて理性を失ってしまう日常的な誘いに絶対に引っかからないことである。危険性をはらんだ説得の「影」の側面に対処するためには、世の中の甘い説得や勧誘に対して常に毅然とした態度で“No!”と言ったり、敬遠して第三者の客観的な判断を仰ぐなどの予防線を日常のコミュニケーションにおいて張り巡らすことをお勧めする。

雄弁でレトリックを縦横に散りばめた口先だけのコミュニケーション・スタイルを駆使して世の中で得をするよりも、少々とつ弁でも誠実でユーモアのセンスに富んだ対人コミュニケーション・スタイルを身に付け、人の話に耳を傾け相手を勇ませるようなコミュニケーション行動を実践したいものである。

第２回　平成 21 年５月９日
シェイクスピアの饗宴　ー英国ルネサンスのバンケットを楽しむー

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 講師　山本 真司

今年の食博覧会・大阪の「宴」もてなし館で最も目を引いたのが、砂糖菓子やマジパンで作った工芸菓子、和洋スイーツの競演だった。

トレンドは、「食」－シェイクスピアもまず味覚から、という時代がきた。

かつてシェイクスピアといえば、坪内逍遙以来、西洋・近代化の象徴だったが、今注目を浴びているのは、「文化」、「環境」、そして、「食」。特に近年は、食文化関連の出版が目立つ。９月には、フェミニストのルネサンス演劇研究家ウェンディ・ウォールが、『食を読む：シェイクスピアからマーサ・スチュアートに至る料理史』を満を持して出版する。

ルネサンスという時代が現代にもたらす影響力の大きさを、歴史学者たちは BBC のドキュメンタリーなどで、繰り返し検証・強調してきた。シェイクスピアや劇の登場人物たちの日常生活をより身近に感じることができる古城やカントリー・ハウスは、いつも人気の観光スポットだ。

シェイクスピアにはとにかく謎が多いが、特に彼の食生活に興味を引かれるのは専門家だけではないようだ。好きな作家や画家（あるいは作品中）の食生活を再現・体験したいという読者は結構多いようで、人文芸術系レシピ本マーケットは元気がいい－『…の食卓』、『…とディナーを』といった料理本が次々と出版されており、シェイクスピアも例外ではない。

シェイクスピアの時代、つまり十六世紀後半から十七世紀前半にかけて大いに発展したのが「バンケット」と呼ばれるマーチパン（現代のマジパン）や砂糖菓子のデザート（コース）である。このようなデザート料理は、中世にはヴォイドと呼ばれ、メイン・コースの後、召使いたちに食事をさせ、ダンスやゲームをするためにテーブルを片付ける合間に奥の部屋で食された。ルネサンスになると、バンケット専用の部屋や家屋が屋上や戸外の見晴らしのいい所に建てられたほどだが、十八世紀にはより洗練された「デザート」に取って代わられる。

バンケットでは、ヒポクラスという中世以来の温かいスパイス入りワインが飲まれたほか、ウエハースや、砂糖漬け・砂糖煮の果物が出された。大宴会のハイライトは、人、植物、動物、そして文字などを象ったアーモンド菓子や砂糖細工のバンケットで、招待客たちは、それを実際の戦闘さながらに破壊しながら食べ尽くすのである。

このバンケットの特徴は、医学的効用、親密化、破壊・蕩尽と権力の誇示である。パトリシア・ファマトンが『文化の美学』（1991）で喝破した通り、料理・建築の両様式において細分化されるバンケットとは、自己を他者から区別しようとする、主体の西洋文明的経験を反映しているのだ。

近年、ますます個食化する日本のスイーツ・ブーム。案外、ルーツはルネサンスの甘いバンケットにあるのかもしれない、と考えるとなんだか愉快だ。もっとも、破壊的欲求に関しては、ゲームなどのヴァーチャルな媒体へ充足の場を移しているようであるが。

第３回　平成 21 年５月 16 日
「ベルリンの壁」崩壊から 20 年　ー東西の格差と「心の壁」ー

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 講師　中祢 勝美

1989 年 11 月９日、ベルリンの壁崩壊のニュースが世界を震撼させてから 20 年になろうとしています。2009 年はヴァイマル憲法公布から 90 年、両ドイツ建国から 60 年、ユーロ導入から 10 年など、さまざまな節目の年に当たります。また、11 月９日は、冷戦の象徴が崩壊した喜びの日であるとともに、ヒトラーらが企てたミュンヘン一揆（1923）やユダヤ人に対するナチスの組織的な迫害（1938）が始まった「負」の日としても歴史に刻まれていることから、ドイツ人にとって「運命の日」と言われます。

ドイツでは「壁の崩壊」を指して「平和的革命」という表現が好んで用いられます。民主化運動で多くの市民の血が流されたルーマニア、リトアニア、中国などとは異なり、非暴力の連帯こそが抑圧的な独裁体制に勝利したのだという点に歴史的意義を見出しているのです。

花火を上げ、抱き合って壁の崩壊を喜んだ東西のドイツ人ですが、「心の壁」の問題は再統一前からすでに指摘されていました。東の人には、傲慢で思いやりに欠ける西の連中（ヴェッシー）が鼻につき、逆に西の人にとって東の連中（オッシー）は自分では働こうとせず、西に援助ばかり要求して不満をもっている人間に映ったというのです。

「数年もすれば、こちらには百花繚乱の景色が広がっているでしょう。」東部の住民に媚薬のような言葉を振り撒いて早期統一を引き寄せたコール元首相は、西の経済力をもってすれば増税せずに東部の復興は可能だと見ていました。第二次大戦で徹底的に破壊されながらも短期間で甦った西ドイツが底力を見せれば、東部の再建などどれほどのものか。そう高をくくっていたようです。しかし、「経済の奇跡」の再来はありませんでした。旧東独の国営企業の多くを解体しなければならなかったからです。

統一の翌年には早くも増税へと方針が変わり、2003 年までの 13 年間で 170 兆円が東部再建に充てられたのに加え、その後も 2019 年まで総額 25 兆円の東部再建策（連帯協定Ⅱ）が組まれています。これほど巨額の資金が投じられてもなお失業率は西の倍（14％）、生産性は西の 70％という状況に、「東は底に穴の開いた樽だ」と意地悪く言う人もいます。さらに東部では若い世代の西への人口流出も目立ち、極端な少子高齢化も起こっています。

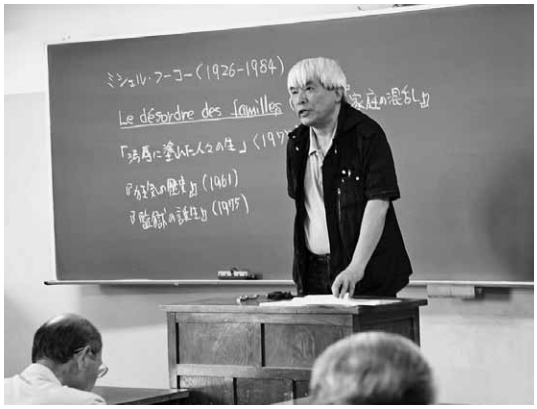
2005 年に導入された「ハルツⅣ」は、「自分たちは二流市民だ」という東部住民の劣等感に追い討ちをかける法律でした。これは、他国に比べ群を抜いて手厚かった失業手当を段階的に減額し、最終的に生活保護と一本化させることによって失業者の再就職を促す「労働市場改革」として構想された法律ですが、長期失業者の多い東部住民は同法を「福祉の切り捨て」と猛反発し、第２の「月曜デモ」で抵抗しました。

現在、ドイツでは貧富の差がかつてないほど広がりを見せています。これは東西の「心の壁」にとって深刻な問題で、最近の世論調査をみても東部では「未来に希望がもてない」、「自分はハルツⅣの負け組だ」、「東西の経済格差は永遠になくならない」と悲観的に考える人が増えています。

ドイツにとって 2009 年は「選挙の年」でもあります。西との格差は依然として大きいものの、東部の産業構造はインフラ整備から製造加工業へシフトしつつあります。ドイツが得意とするモノ作りを東部で軌道に乗せ、西に出て行った若者を呼び戻すことが最大の課題ではないでしょうか。東部の州選挙で極右政党が躍進すれば、輸出大国ドイツ全体にとってもマイナスです。その意味で、夏から秋にかけて行われる東部の州の州議会選挙や連邦議会総選挙のゆくえが大いに注目されるところです。

第４回　平成 21 年５月 23 日
国王封印状　ーフランス絶対王政下のある真実ー

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 教授　田中 寛一



およそフランス史にあって「封印状」とは旧体制（アンシャン・レジーム）下における国王の命令書一般を指し、これには王令の登記を要請する高等法院宛ての書状なども含まれていたが、17 世紀後半からフランス革命までの絶対王政下にあっては、たとえば反乱を企てた貴族とか不実を働いた臣下といった国事犯の追放または監禁を、一切の司法手続なしに、国王が専横的に命ずるための書状を意味するようになる。国王の署名と国務卿による副署を要し、封蝋に国王印璽が刻まれていたためこの呼称がある。ヴォルテールやディドロのように、多くは何らかの筆禍事件により国王の怒りに触れ、バスチーユやヴァンセンヌといった国家監獄に、理由も告知されぬまま連行され、期間も明示されることなく監禁された。

国王のこうした権限は国王留保裁判権の一環として成立していたと解される。すなわち王権神授に基づく「スベテノ正義ハ王ヨリ発ス」という法格言のとおり、司法権を掌握する国王は、普段はこれを裁判所に委任しているだけであって、国家理性を楯にいつなりとも司法に介入し、審級にせよ判決にせよ自由に変更することができる権能である。フロンドの乱に見られたような王権と高等法院との対立が根底にあり、国王は司法手続を踏む時間的な余裕がないという理由で、通常の裁判を省略し、行政措置として一個人を一時的に監禁しえた。ルイ 15 世治世下の後半 35 年間で約２万通が濫発されたというから、民衆の評判はすこぶる悪かった。封印状はバスチーユとともに、絶対君主の恣意の象徴と見なされ、大革命を呼んだ一因とされた。

しかしながら、封印状に対するこうした見方は一面的に過ぎず、その濫用は実のところ君主の専横のみの結果ではなかった。というのもその大部分は、家庭生活を悲嘆の淵へと追い込んだ家族の一員を、排除することによって事態の収拾を図るべく、身内により請願された結果に他ならなかったからである。たとえばサド侯爵の監禁にせよ、その淫蕩を知った義母からの訴状によるものであって、国王自身の判断ではない。ミラボー侯爵は女性問題により息子のミラボー伯爵の投獄を願い出て、またヴォルテール自身も、自分を中傷した女家主を監禁するよう訴え出て、それぞれ封印状の下賜に成功している。これを要請したのは体面を重んじる貴族や名家ばかりではない。一般市民が、どちらかといえば下層階級に属する者たちがこぞって、食費の支払いを条件に、殴打する夫の、アル中の妻の、非行に走った息子の、駆け落ちした娘の、監禁を命ずる国王書状を取り付けてくれるよう、パリでは警察総監に、地方では地方長官に縋り出た。

庶民が収監された先は、身分があり高貴なる者を待遇よく監禁した国家監獄ではない。1657 年の王令により開設された一般施療院がそれである。本来は飢饉と疫病に苦しむ生活困窮者を収容する慈善的な目的でパリに設置された、男性用のビセートルや女性用のサルペトリエールといった施療院が、治療施設としてではなく一種の代用監獄として、失業者や浮浪者のみならず、警察総監が封印状によって送り込んできた、性病患者･放浪者･淫蕩者･浪費家･売春婦・同性愛者・性倒錯者・涜神者・魔術師・無宗教者・精神錯乱者など、不道徳または非理性にある者すべてを、公共福祉の一環として閉じ込め監禁した。

したがって「国王封印状」の実際は、その悪評にもかかわらず、生活破綻者を抱えた民衆に対する、一種の公共サービスであったと言える。（講座では、多くは代書屋に書かせた民衆の側からの請願書を解説したが、本稿では紙幅の都合で省略させて頂く。）

第５回　平成 21 年５月 30 日
「書評」で読み解くスペイン・ラテンアメリカ文学

国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科 教授　片倉 充造

はじめに

本講座では、テキストとして片倉充造『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』（沖積舎、2009）を使用し、スペイン・ラテンアメリカ地域についての基本的な知識の紹介を主旨とする。（以下の構成は同書に準拠するものであり、Ⅰでは 31 書のうち３編を、Ⅱ（a）では 16 書のうち２編を、Ⅱ（b）では 16 書のうち２編を、そしてⅢでは 19 書のうち２編についてそれぞれの書評テキスト（引用１～９）を付録して受講者に配布、解説。）

Ⅰ. スペイン編

Toda España está metida dentro del Quijote. “スペインのすべてが『ドン･キホーテ』にこめられている。”＝ダマソ･アロンソスペインの碩学の名言を受けて、セルバンテスの大著『ドン・キホーテ』（1605/15）に関係する代表的な邦訳書の紹介を進めるとともに、スペイン文化・文学の特徴を探る。

１．ハイメ・フェルナンデス『ドン・キホーテへの招待』（柴田純子訳、西和書林、1985）　引用１
　P.E. ラッセル『セルバンテス』（田島伸悟訳、1996）
　VTR1=〈ラ・マンチャの男〉
２．壽里順平 / 原輝史編　『スペインの社会』（早稲田大学出版部、1998）　引用２
３．榎本和以智『日本人には分からないスペインの生活』（南雲堂フェニックス、1998）　引用３
　高森敏明『スペインおいしい紀行』（NTT 出版、1998）

Ⅱ. ラテンアメリカ編

(a)［メキシコ編］

４．カルロス・フエンテス『埋められた鏡』（古賀林幸訳、中央公論社、1996）　引用４
　VTR ２＝〈老いぼれグリンゴ〉
　ロサリオ・カステリャノス『バルン・カナン』（田中敬一訳、行路社、2002）
５．エンシーナス弥生『メキシコ人』（文芸社、2001）　引用５

(b)［中南米編＝コロンビア / ペルー / キューバ］

６．ガルシア＝マルケス『愛その他の悪霊について』（旦敬介訳、新潮社、1996）　引用６
７．ホセ・マリア・アルゲダス『ヤワル・フィエスタ（血の祭り）』（杉山晃訳、現代企画室 1998）　引用７
　アレホ・カルペンティエル『エクエ・ヤンバ・オー』（平田渡訳、関西大学出版部、2002）
　加藤隆浩『ラテンアメリカの民衆文化』（行路社、2009）

Ⅲ. その他

８．制作スタッフ編　『家政婦は見た！石崎秋子のぞき見日記』、（ソニー・マガジンズ、1997）
　現代日本社会でのピカレスク（悪者）文学作品としての読み　引用８
　VTR3=〈家政婦は見た！〉

＊同書巻末の「石崎秋子履歴書」（手書き資料）をもとに人物像を解釈するワークショップ。

９．ジェイムズ・ルセーノ『マスク・オブ・ゾロ』（奥村章子訳、ハヤカワ文庫、1998）
“コヨーテ”やゾロを起源とする義賊作品ならびにスペインと米国南西部の関係性　引用９
VTR4=〈マスク・オブ・ゾロ〉

おわりに

１）グローバル化する現代社会とスィエスタ（=siesta: スペイン語圏独自の昼休み制度に代表される慣習的時間運用）の継続との対照。（= この問題提起は、『スペインの社会』での基本的論調に等しい。）

２）読み解かれるスペイン像、ラテンアメリカ像とは？
スペイン文化の特異性は、キリスト教文化・ユダヤ教文化・イスラム教文化の共存（＝異質なるものの共存）と指摘されるが、スペイン文学の特徴は、12 世紀の叙事詩『わがシッドの歌』以降『よき恋の書』（フアン・ルイス、1343?）や『ラ・セレスティナ』（フェルナンド・デ・ロハス、1499）、『ドン・キホーテ』など、リアリズムとユーモアで人間性を描き上げることを伝統としてきたと集約できる。ラテンアメリカ文化の共通分母＝スペイン文化という論旨（カルロス・フエンテス『埋められた鏡』）を基盤とする、導入されたヨーロッパ文化と在来のアメリカ大陸先住民文化との出会い（レオポルド・セア）・融合の検証。文学的には、インディヘニスモ（先住民主義）作品から魔術的リアリズムまでの振幅を持つ。

３）「書評」実践の意義：
清水憲男「日本人が『ドン・キホーテ』を読むということ」、『ドン・キホーテを読む』（京都外国語大学ｲｽﾊﾟﾆｱ語学科編、2005）
川辺秀美『カリスマ編集者の「読む技術」』（洋泉新書、2009）

【基本参考資料】（順不同）
川成洋『スペイン読書ノート』南雲堂、1989／『書林探訪－未読、乱読、精読のすすめ』行路社、2000
鼓　直『ラテンアメリカの小説の世界』北宋社、2000
野谷文昭『ラテンにキスせよ』自由国民社、1994／『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』五柳書院、2003
杉山晃『ラテンアメリカ文学バザール』現代企画室、2000
原誠 他編『スペインハンドブック』三省堂、1982
池上峯夫 他監修『スペインを知る事典』平凡社、2001
大貫良夫 他監修『ラテンアメリカを知る事典』平凡社、1987
ホセ・ガルシア・ロペス『スペイン文学史』（東谷待人・有本紀明訳、白水社、1976）
ジャン・カン『スペイン文学史』（会田由訳、白水社、1990）
ペドロ・シモン『ラテンアメリカ文学研究』（木下登監訳、行路社、2000）
ジャック・ジョゼ『ラテンアメリカ文学史』（高見英一・鼓直訳、白水社、1990）
天理大学ヨーロッパ・アメリカ学科編『ヨーロッパ・アメリカ文学案内』南雲堂フェニックス、2005
樋口正義 他編　『ドン・キホーテ事典』行路社、2005
京都外国語大学イスパニア語学科編『ドン・キホーテを読む』行路社、2005
片倉充造『ドン・キホーテ批評論』南雲堂フェニックス、2007

第１回　平成 21 年 11 月７日
近代大和の出産習俗　ーお産が病気ではなかった時代ー

文学部歴史文化学科 准教授　安井 眞奈美

近代の大和では、人々はどのように出産に臨み、子育てをしていたのでしょうか？

発表では、歴史資料や聞き書き調査の成果をもとに、産科医に診てもらうことは稀であった時代の出産について紹介し、命の誕生について考えてみました。特に、明治後期から大正初期ころの人々の暮らしを詳しく記した「奈良県風俗誌」という資料を参照しています。

「奈良県風俗誌」と呼ばれる膨大な資料群は、大正４（1915）年に大正天皇即位記念事業として、奈良県教育会が企画した民俗調査の報告書を指します。現在、奈良県立図書情報館で閲覧が可能です。この調査は、奈良県下全域の市町村で 1200 を越える質問項目について一斉に聞き書きをするという、規模の大きなものでした。「奈良県風俗誌」という、近代大和の人々の日常生活の詳細な記述のなかに、妊娠・出産の様子だけではなく、子どもの誕生儀礼やさまざまな習俗なども記されているのです。

たとえば、子どもの分身と考えられた胎盤（胞衣）を大事に家の床下に埋めたり、子どもの着物の背の部分に背守りや背縫いと呼ばれる魔除けをつけたり、さらには、月代（さかいき）と称して生児の髪の毛を独特な形に剃ったりする習俗などです。当時の人々は、これらの儀礼や習俗を通じて、あの世からやってくると考えられていた子どもをこの世へと迎え入れ、病気や悪霊などから守り、健康に育てていこうとしたのでした。そして多くの場合、子どもを取り上げた産婆もこれらの儀礼に参加し、子どもの成長を見守っていったのです。

発表者は、当初、西洋医学の知識を身に付けた産婆たちは、妊婦にとって、安産に導いてくれる心強い存在であったにちがいない、と考えていました。しかし、「奈良県風俗誌」の史料や発表者の聞き取り調査の成果を重ね合わせてみると、当時の人々は、出産そのものをすべて産婆に委ねてしまうのではなく、あくまで女性が自らの身体を存分に使って出産に臨み、また、家族や村の人々もできる限りそれを支えていく－そのような様子が、断片的ながらも浮かび上がってきます。安産のためには、むやみに心配せずに、自然の摂理に委ねてしまうのがよい、そして、あの世からこの世へやってくる新生児をきちんとこの世へ迎え入れる準備をする。これらの姿勢は、産婆という医療従事者にすべてを任せるのではなく、むしろ命の誕生を全うさせるための祈りに近いようなものであったと思います。

現代のように、「病院で無事に産んで当たり前」という意識が強い中では、当時の様子を想像するのは難しいかもしれません。しかし、人間の力を超えたあの世の存在に祈るような気持ち、そしてそれに託せば安心でき、それが結果として安産をもたらしてくれる－当時の妊娠・出産の記録からは、そんな人々の暮らしと祈りの様子が浮かび上がってきます。

【参考文献】

安井眞奈美 編著『産む・育てる・伝える－昔のお産・異文化のお産に学ぶ』風響社、2009
『胞衣の近代－「奈良県風俗誌」にみる出産習俗の変容』、2006
天理大学文学部編『山辺の歴史と文化』奈良新聞社

第２回　平成 21 年 11 月 21 日
大和の木地屋

神奈川大学特別研究員、元奈良県立民俗博物館主任学芸員　森本 仙介

かつて吉野は日本一の杓子生産地であった。明治７年の奈良県における杓子生産はおよそ 390 万本であり、宮島杓子で有名な２位の広島県の 24 万本をはるかに超えている。そのほとんどは旧大塔村の篠原･惣谷、そして天川村の塩野･塩谷･滝尾･広瀬といった山深い村々で製造されたものであった。前者が粥や汁物をすくう坪杓子（つぼじゃくし）を製造したのに対し、後者は御飯をよそう平杓子（ひらじゃくし）を専門にしていた。

村々では明治から昭和初期には男手のあるほとんどの家が杓子作りをしていた。坪杓子は水に腐りにくいクリが最も多く、ナラやサワグルミも使われた。一方、平杓子ではミズメ、ブナ、ミズナラ、サワグルミ、ヤマナラシをはじめ 15 種類以上の多種多様な雑木が使われる。戦前は十津川村や野迫川村や高野山麓に数ヶ月から１年以上も泊まりがけで雑木の杓子を作る職人も多かった。村人は数人でグループを組み、原生林に分け入り、柱を地面に突き立てて藤蔓で結い、樹皮や枝で壁や屋根、床を作り、４人ほどが寝泊まりできる作業小屋を山の中に建てた。家に帰るのは盆か正月、あるいは女手だけでは間に合わない農繁期だけであった。

まだ薄暗いうちに小屋を出て木を伐採に出かけ、夜の 10 時頃まで石油ランプの灯りの下で４人がお互い競うように黙々と杓子を削り続けた。坪杓子は１日 150 本､ヒノキの平杓子は１日 400 本（雑木は 250 本）で一人前とされた。１本１本の木の性質を見極め、少ない材料からたくさんの均質な商品を早く製造することが職人の腕前とされた。

仲介地である下市や五條、高野山にはたくさんの林産物問屋が存在した。資金力のある村人が親方となって山を買い、村人と賃労働の契約を結ぶことが多かった。杓子は大阪などの荒物店へと出荷、消費地である都市での販売動向も問屋を通してすばやく生産に反映された。問屋から送ってもらう日常品などは掛け払いで、杓子代とあわせて年２回精算される。

椀や杓子のような木工製品を作る職人は木地屋（きじや）と呼ばれる。江戸時代、彼らは材料の木を求めて数年から数十年単位で奥深い山中を点々と移住した。しかし、近世末から近代にかけて活動した吉野地方の杓子屋は、深山を漂泊する自由な山民という従来の木地屋のイメージとはほとんど重ならない。むしろ、そこから見えてくるのは消費社会の流通システムのなかで生き残りを賭けて時代に適応して変化する山村の姿である。

木地屋たちが定住化、農民化して形成された一般的な木地屋集落とは異なり、吉野の木地屋集落は幕末になってから杓子生産をはじめた半農半工の集落である。吉野地方をはじめ全国に残る江戸時代の杓子は坪杓子と平杓子の機能が未分化である。おそらく吉野では幕末から近代にかけて形状の分化に応じて産地が特化したのであろう。さらに問屋のような都市商人の外部資本が直接的･間接的に入ることで、賃労働による専業化が加速したと考えられる。さらに生産が増えることで近隣の原料の不足を生じ、奥山に広がる天然林の大規模な資源を活用することが必要となる。

杓子をはじめ曲者、箸、経木、漆など吉野地方西部において天然林を利用した林産物の産地化が進展した背景には、古くから栄えた町場である五條、下市、高野山へのアクセスが良かったという地理的な要因が大きい。これらの町場には多くの林産物問屋が軒を並べ、奥吉野と大阪のような都市を仲介する役割を担っていた。モノの流通というだけでなく、問屋を通じて消費地の趣向、品質や技術の改良に関する情報が産地に伝えられることで時代に即した素早い対応が可能となったのである。

第３回　平成 21 年 11 月 28 日
大和の春の民俗行事　ー卯月八日の天道花を中心にー

文学部歴史文化学科 教授　飯島 吉晴

本格的な稲作農耕が開始される直前の晩春から初夏にかけての時期、大和地方ではさまざまな興味深い民俗行事が展開されてきた。レンゾ、ダケノボリ、卯月八日などは、その代表的なものといえる。

この時期は小学唱歌「夏は来ぬ」のなかで「卯の花のにおう垣根にホトトギス早も来鳴きて」と歌われているように、中世には氏神祭りの象徴ともされ、早乙女花、田植花と呼ばれた白い卯の花が農家の垣根で咲き乱れ、そこに勧農鳥や時鳥として農作業の目安とされてきたホトトギスが鳴きにくるという、まさに農民にとってつらく多忙な季節の到来といえる。この春から夏への季節の変わり目には、花見、花祭、花会式、花折り始め、花供養、花の撓、鎮花祭、花供懺法会など季節柄か花にまつわる諸行事が多いのも特徴である。折口信夫が「花と言ふ語は、簡単に言ふと、ほ・うらと意の近いもので、前兆・先触れと言ふ位の意味になるらしい」（「花の話」）と指摘しているように、花は農耕や世の中の前兆を示すため神意を占ったり神霊の依代として神聖視されてきた。花見も、かつては農耕の豊凶を占う神事だったのである。万物が甦り、百花咲き乱れるこの季節は、同時に疫癘がはびこる時期としておそれられた。そのため、日本人は春三月には死霊や御霊を鎮め祭って疫病拡散やもろもろの厄災を防ぎ祓うために、花にこうした諸霊を依り憑かせて退散してもらう鎮花祭ややすらえ花の神事･芸能や、花の経典である法華経で仏式に祭る法華会がおこなわれた。たとえば、大神神社と摂社狭井神社の鎮花祭や東大寺三月堂の法華会＝桜会はそうした行事であり、春迎えの行事である東大寺二月堂のお水取りや薬師寺の花会式も仏へ罪過を懺悔することで豊穣と招福・除災を祈願した修二会として催され、こちらは生花がない時期なのでもっぱら造花が用いられた。国家レベルでは、春祭りは神祇的には五穀豊穣を祈願する祈年祭であるが、仏教的には修二会であるが、村レベルでは神仏が混交した形で豊作と安泰の祈願がなされる。とくに大和は古い寺社が多いので、村の年中行事と大きな社寺の行事とが結びついているものが少なくない。

たとえば、大和の国中地方では春の訪れと共にレンゾという行事が広くおこなわれている。レンゾは、当麻寺の練供養を練道と音読したのが始まりといい、三月から五月にかけて、法隆寺レンゾ、文殊さんレンゾ、大和さんレンゾ、薬師さんレンゾ、三輪レンゾ、矢田レンゾ、神武さんレンゾ、久米レンゾ、当麻レンゾ、八十八夜レンゾなど各地域ごとに寺院や神社の縁日を契機になされる農休みである。レンゾは本来「蓮や蓬などの香りの強いものを食べて体内の毒気を祓い、身体を浄め、ツツジなどの木や花に降臨する田の神を山に迎えに行き、そこで神人共食の直会をし、実際の農耕に取りかかる前の田の神祭りの日」（『奈良県史　民俗［上］』）であったとされている。レンゾの日は、通常一日休みで親戚・知己を招いてご馳走するが、この日に山遊び・川遊びする風習があり、また神野山周辺ではツツジの花見をし、その花を持ち帰って水口祭りをするという。レンゾからは八朔まで午睡がはじまるが、日照時間も長くなるので、夕方おそくまで外で働かねばならなくなるので、この日の蓬餅を「レンゾの苦餅」といった。

大和には古くからダケやダケ山と称する特別な山が各地にあり、雨乞いをする水神的性格と同時に、周囲の村人が弁当を携えてダケに登り一日行楽して過ごすダケノボリやヤマガイリという行事がある。ダケノボリする範囲は「嶽の郷」と呼ばれ、俗に「嶽の水でご飯を食べる村」といって嶽から下る水で稲作をする村々というが、東山中のように各大字ごとにダケがあって八十八夜レンゾにダケノボリするところもある。二上山麓の村々では二上神社の祭祀に関わる六十余の大字に及び、当麻レンゾの範囲とも一致しているという。レンゾやダケノボリは、他の地方の山遊びや磯遊びなどに相当し、田作りの開始に当たって山や磯の精気を身につけ、またツツジなどの花に田の神

を依り憑かせてきて水口に祭る行事と見ることができる。

卯月八日は釈迦の降誕会で、灌仏会・花祭り・仏生会と称して、寺院では花御堂に誕生仏を祭り、甘茶をかける行事が行われている。卯月八日の法会は盂蘭盆会とともに古くに伝来したらしく、『日本書紀』推古天皇十四年（六〇六）に、すでに「是の年より初めて寺毎に、四月八日、七月十五日に設斎す」とある。また宮中でも、静安によって承和七年（八四〇）に灌仏の儀礼が修されたという。しかし、民間の村々では、この寺院の灌仏会とは直接関係のない行事が多く、野山行きの日、山の神の祭日、霊山の山開きの日、山野で花を摘んで竹竿の先に結わえて庭先に立てる日、墓参りの日などとしており、とくに春山入り、花立て、先祖供養の三つの要素が目立つ。五来重は、仏生会のほか、花立ての天道花、卯月八日の山寺での先祖供養、山開きと成年式・成女式の三つの民俗が結合して卯月八日の花祭になったという（「灌仏会と花祭」）。

大和の平坦部では、一般に竹竿の先にオツキヨウカの花（ツツジの類）を十文字にくくりつけて庭先に一週間くらい立て、お月さんに供えるのだという。また「お月八日、花より団子」といって、その間ずっと団子を供えたという。東山中では、高低二本の竿に花を立て月と星に上げるといい、七日に雨が降ると花のツユとして吉兆だという。高市郡では、八日花といい、花はお月様に届くほど高くするのが良いといい、草鞋もさげて脚気の呪いにしたという。また「お月八日、花たばれ九日」といって、八日晩に洗米と灯明をあげて月を祭り、翌日には倒して屋根に上げたり、川に流したりした、地域によっては、この花を保存しておき、行方不明の人や牛を探すとき、花を燃やした煙の方向で行方を占ったという。田原地区の長谷では、竹竿の先に紅ツツジ、藤、山吹などを十文字に、その下にも一束くくりつけ、さらにその下に小籠も吊して、花や三本足の蛙が入っていると吉だという。三本足の蛙の伝承は東山中にもあり、蛙＝再生を象徴する動物という意味だろうか。また「この花上げたらゲ百日花を供えたんと変わらん」という伝承もあり、これは和歌山県有田地方で夏花といって四月八日に立てはじめて盆の七月十三日まで立てる風習と関連したものだろう。兵庫県には、卯月八日の花折り始の日に、寺で新仏の花施餓鬼をしたり卯月年忌といって団子やおはぎを供え、樒で水をたむけて供養したりする例が多い。

修験道では、夏の修行を花供または花供入峰といい、四月十五日から七月十五日まで一夏九旬の九十日間毎日吉野、熊野、羽黒、白山、立山などの修験の霊山の諸堂社に花（樒や石楠花など）を供える行で、夏行ともいった。この夏行入りが卯月八日の釈迦降誕の日に移され、おおくの修験道の山ではこの日を山開きとして山伏の夏の峰入りがおこなわれた。室町以降、金峰山では卯月八日は大晦日に山に籠もって修行した晦山伏が出峰して験競べする日であると同時に、当行衆（夏衆）はこの日から七月十五日まで山中の霊地に供花する修行をおこなった。山上ヶ岳でも最近まで卯月八日（今は月遅れの五月八日に近い五日）に戸開式、九月九日に戸閉式をおこなっていた。大峰山は、大和だけでなく関西一円で十五歳の男子が成人式として登頂する風習がある。女子も田植えを前に一人前の早乙女の資格を獲得するために山に忌籠もり、巫女の印としてツツジなどの花を挿頭花（かざし）として髪に挿したのが纏頭花であって、それが誤って天道花になったのだという説も提出されている（五来重）。

大和の国ほめの歌に「倭は國のまほろば　たたなづく青垣　山隠れる　倭しうるわし」とあるように、大和の国は四方を青垣なす山なみに囲まれ外界から悪霊邪神の進入を防ぐ聖なる防壁としており、それによってまさに国のまほろとしている（高取正男）。青々と茂る青山に守られると同時に、青山に宿る山の精気を花や木によって田の神として里の田に導き農作の守護神としてきたのである。大和の春の一連の民俗行事はこの事実をはっきりと示している。

第４回　平成 21 年 12 月５日
大和の伝説　ー若草山と理源大師の大蛇退治ー

文学部歴史文化学科 教授　齊藤 純

講演では、若草山と理源大師の大蛇退治に関わる伝説を紹介し、背後にある近世の人々のものの見方や考えを読み解いた。すなわち、若草山と葛城山は、ヌシである大蛇が棲む水源の霊山という似通った性格の山と考えられていた。また、若草山から流れ出し、東大寺の旧東南院北側を西へ向かう白蛇川は、理源大師の大蛇退治に関係深い川であり、退治されて人間に降服した大蛇を封じ込めた所とされていた。さらに、近世の名所記『奈良名所八重桜』は、大蛇が若草山から常に水を出してくれるよう、大師と約束し、若草山の山焼きが始まったという注目すべき由来譚を載せている。この由来譚から、山焼きは水源のヌシに向けた祭りの一種だという考えが読み取れる。以下、要点を説明したい。

元禄年間～享保 19 年（1688 ～ 1734）の京都周辺の見聞記『月堂見聞集』は、“享保元年（1716）６月、葛城山が鳴動して法螺貝が出ると、若草山が破れて水が出た”という不思議な伝承を記している。土石流や崖崩れは、大地を抜け出した法螺貝の仕業だという「法螺抜け」伝承は、実は日本各地にある。同様に、大蛇が大地を抜けて災害が起きるという「蛇抜け」伝承も多い。これは、竜や蛇を水のヌシと古くから考えてきた上、それが地下で大地を支えているという中世以来の世界観があり、さらに崩壊の濁流が蛇体を思わせたことから生じた伝承と考えられる。法螺貝については、珍しい南海の生物で、それが修験道の儀式や修行で使う霊験あらたかな道具になった。そのことから、水底の神秘的存在で、竜蛇の同類と考えられ、彼等と同様、水の恵みや災害の原因とみなされたようだ。なお、葛城山は修験道の霊山で、開祖･役行者の修行地と伝えられる。山上の龍王ノ谷には竜王の池があり、水神の竜を祀って雨乞いが行われた。このように葛城山が水源の霊地で、竜蛇や法螺貝の居所とされたのは理解できる。が、若草山と対にした発想は理解しにくい。

ところで、延宝６年（1678）の『奈良名所八重桜』を読むと、東大寺東南院にいた理源大師が葛城山の大蛇を退治し、若草山の「袈裟谷」に棲まわせて水を出させ、その約束で山焼きをするという話が記されている。この「袈裟谷」は、貞享４年（1787）の地誌『奈良曝』の記述と、関係する社殿の配置から白蛇川の上流と判断できた。理源大師・聖宝は平安時代の真言僧である。醍醐寺の開基として有名だが、大峰山再興の修験道中興者とも伝えられる。彼の大蛇退治は正安元年（1299）に写された『醍醐寺縁起』以来、各種文献に見られる有名な話だが、ほとんどは大峰山か東大寺での出来事である。つまり、『奈良名所八重桜』が記す葛城山の大蛇退治は異色の伝承なのだが、近世前期、葛城山と若草山が同じ大蛇の住処であること、ひいては同様な水の霊地とされていたことがうかがえる大変興味深い資料である。ちなみに『奈良曝』も、役行者が葛城山を開いて山伏の峰入りが始まったが、後に大峰に大蛇が棲んで峰入りが中絶。その大蛇を滅ぼすため、聖宝が葛城山に入ったという、大峰と葛城を矛盾したまま併記する伝説を載せている。理源大師の大蛇退治伝承は、大峰山のみならず、葛城山を舞台とする系統のものもあったのではないか。

また、『奈良名所八重桜』に記された大師の大蛇退治は、元永元年（1118）の『東大寺要録』諸院第四「三面僧房」が記す、大師による東大寺の大蛇退治譚とよく似た部分がある。退治後に再び大蛇が現れ、大蛇の住処を移し、それによって大蛇の霊験があることである（ただし、葛城山への言及はない）。つまり、『奈良名所八重桜』のような話は孤立した伝承ではなく、一定の支持があって伝えられていたと考えられる。

なお、奈良の近世地誌には、白蛇川流域のあちこちに理源大師の大蛇退治伝説が伝わる。退治され、人間に服するようなった水のヌシの居所という考えがあった由縁であろう。

第５回　平成 21 年 12 月 19 日
大和の麻・木綿・きもの

文学部歴史文化学科 非常勤講師　酒野 晶子

大和の国では、河内や和泉と同様にワタが栽培され、糸を紡いで木綿布を織るということが、人々の暮らしと密接に結びついていた。「稿本天理教教祖伝逸話篇」の中でも、木綿に関わることがらや仕事について、女性ならではの細やかな目で語られている。

木綿はわが国の天然繊維の中では新しいもので、江戸時代を中心に全国に急速に広がる。大和は先進地域の一つである。木綿の産地では、江戸時代を中心に盛んに生産高が増加した。明治時代に外国からの安価なワタの輸入の影響を受け栽培が終わるまで、従来の麻やシナなどの繊維に代わり急激に人々の暮らしの中に広まった。衣服材料としての快適さ、木綿服の着心地のよさに加え、糸づくりが楽であったことがその原因であったと思われる。

各地の綿産地は、機械による紡績糸の普及によって姿を変えて急激に衰退し、大正時代に生産がほぼ終わる。

これらの産地と異なり、大和では人々の尽力によって従来よりあった大和絣（かすり）の製作工程を改良し、新しい技術を活用して生産高は増加した。　新しい技術とは、化学染料の導入や手間のかかる絣糸の染色を型板を使って板締（いたじめ）で染める技術などである。一般的な紺絣に加えて白絣も非常に多く生産され愛用された。大和では、絣を中心に細々ではあるが昭和 40 年代まで生産された点が、他の産地と大きく異なる。

大和の麻

大和には「奈良晒（さらし）」という全国に知られた麻織物がある。良質の白地の麻布で、神職の衣服や茶道の茶巾（ちゃきん）などに使われた。旧月ヶ瀬村（現、奈良市月ヶ瀬）周辺の村では古くは縞や格子の麻布も生産されていたが、現在では「奈良晒」といえば白地の麻布を指すことになっている。麻布は、クワ科のタイマとイラクサ科のカラムシを原料とする。カラムシの方が地の薄い上質の麻である。月ヶ瀬では、原材料を購入して糸づくりから織りまでを行い、その後「晒（さら）し」（漂白）という工程を経て白い麻布に仕上げられた。

晒しの工程が行われた場所は「大和名所図会」に「ならのさらし場」と紹介されている、佐保川の河原かと思われる。薬品を使う以前の植物繊維の漂白は、水と灰汁・太陽光と干し場である草原を利用して行われ、「天日晒（てんぴさらし）」と呼ばれる。まず織り上げられた布を灰汁を加えた水で煮る。その後臼で搗く。これは糊や不純物を除く精練という工程で、その後水洗いして河原の草の上に広げて太陽光で乾燥させる。乾燥したらふたたび水をかけて放置して乾燥させる。水で濡らす・乾燥させるを繰り返すと麻布は次第に白くなる。時間がかかるが繊維に負担の少ない方法である。

月ヶ瀬では、奈良晒保存会の方々によって糸づくりから機織りまでの技術が継承されている。

大和の織機

木綿や麻を織ったのは地機（じばた）（下機（しもばた）・木綿機）と呼ぶ機械である。大和に多く残るのは、大和絣を能率的に織るために使われていた大和機（やまとばた）と呼ぶ高機である。より能率的なバッタン装置の付いたチョンコ機も使われた。地機が残っておらず、大和機だけが使用されたように思われがちなのは、周辺の地域より遅くまで盛んに織り続けられたため、能率よく織るために地機から大和機への転換が盛んに行われたためであろう。

大和のきもの

近畿地方の平野部の女性の仕事着は、長着（きもの）を短く着るのが一般的で、特色のある形の仕事着は見られない。ズボン式のモンペは太平洋戦争時から着用が始まる。大和には深い山岳地帯があるため、他の地方より早くからズボン式の下半衣が使われた。男性の仕事着は、筒袖・腰丈の上半衣とパッチと呼ばれる股引（細いズボン状）が周辺の地方と同じく着用された。女性の平常の下着は、紺地に細かい型染の木綿布で作った半襦袢（はんじゅばん）と腰巻の組合せである。長着の表地は、細かい縞や格子・絣の木綿を使用した。模様が大きくなるのは大正時代以降である。子供の衣料には少し大きめの模様の木綿が使われた。

平成 21 年 7 月 27 日
中国語発音教授法

国際文化学部アジア学科 教授　中川 裕三

今回の講座では、日本人教員が日本人初学者に教えるという立場から、講演者がこれまでに蓄積した中国語発音教育のノウハウを 20 のポイント（P）に整理して紹介した。

P０　発音のコツ

日本人教員が日本人学習者に教える場合、ただ真似をさせるだけではなく、どうしたらその音が出せるか、コツをわかりやすく説明することが重要である。

P１　第３声

低平だと教えると、第２声との混同を避けることができる。シッポは力を抜いたら自然な高さに戻るときの「おまけ」である。

P２　“o”と“e”：両者の相違点を強調する。

“o”は「円唇性」があるのに対し、“e”は円唇性のない「曖昧母音」である。

P３　ウムラウト“ü”

口の中は“i”のように平べったく、外は“u”のように突き出した形にする。

P４　“er”

“a”の口で舌をそらせる。舌と一緒に下顎が上がる場合は、手で顎を固定するとよい。

P５　“i”に狭められる“e”

“e”は前後に“i”又は前に“ü”がくると、狭められて「エ」に近い音になる。→“ei”、“uei”、“ie”、“üe”

P６　“-n”と“-ng”３つのポイント

両者は次の３つの点で異なる。

①調音点は“- n”が前舌、“-ng”は後舌である。

②口の開きは“- n”が狭く、“-ng”は広い。

③音の長さは、“- n”が点のように短く、“-ng”は口を開ける分だけ長い。

P７　“n”に狭められる“e”

“e”は“n”が後ろにくると、狭められて「エ」に近い音になる。→“en”

P８　前後から狭められる“a”

“a”は主張の強い母音であるが、狭い母音に前後から挟まれると、狭められて「エ」に近い音になる。→“ian”“üan”

P９　ゼロ声母＋“ong”

中国語に“ong”だけの音節は存在しない（P19 参照）。

P 10　“iong”＝“üng”

“iong”は実際には“üng”の音に近い。

P 11

声母を発音するときは、調音点を明確に意識させるのが肝要である。

P 12　無気音と有気音

無気音は発音する前に声門を閉じておく。有気音は母音を発音する前に息の音［h］が入る。

P 13　“b/p/m/f”＋“o”

“u”は表記されていないが、“uo”のつもりで発音させる。

Ｐ 14　そり舌音の３つのポイント

そり舌音を発音するときは次の３点に注意するとよい。

①唇を外にそらせて四角い口をする（唇を使うと“ü”との対立が出なくなる）。

②“i”があっても口を横に引かない（空間がないと舌をそらすことができない）。

③“zh/ch”はそらせた舌先が上の歯の後ろに接触するのに対し、“sh/r”は舌をそらせるが、舌先はどこにも接触しない。

Ｐ 15　３種類の“i”

「イ」の音は舌面音“j/q/x”の後ろのみである。そり舌音“zh/ch/sh/r”と舌歯音“z/c/s”の後ろの“i”はそれぞれ音が異なる。

Ｐ 16　舌歯音＋“i/e/u”

日本人には発音も聞き取りも難しいので、口の形に注意しながら、次の９つの音の区別ができるようになるまで練習させる。

zi	ci	si	（歯を食いしばる）
ze	ce	se	（z/c/si ＋ e）
zu	cu	su	（z/c/si ＋ u）

Ｐ 17　消える“o”

“iou”は声母の後ろにくると“iu”と表記するが、第３声で発音する場合“o”の音が聞こえるので、聞き取りのときに“iou”と書かないよう注意させる。

Ｐ 18　消える“e”

“uei”と“uen”も声母の後ろにくるとそれぞれ“ui”、“un”と表記するが、第３声で発音される場合“o”の音が聞こえるので、聞き取りのときにそれぞれ uei”、“uen”と書かないよう注意させる。

Ｐ 19　声母＋“ong”

“u”は表記されていないが、“uong”のつもりで発音させる。

Ｐ 20　“h”

口蓋垂を摩擦する点、中国語で最も奥よりの音である点を意識させる。

“h”の後ろに“ua/uan/uang”又は“ui”がくるときは、“u”を「オ」のように発音させる。聞き取りのときに“oa/oan/oang”又は“oi”と書かないよう注意させる。

平成 21 年 7 月 31 日
成長期に特徴的なスポーツ外傷・障害の基礎知識

体育学部体育学科 講師　寺田 和史

スポーツによるけがは大きく２通りに分けられる。一つはスポーツ外傷で、転倒、衝突などの１回の外力によって組織が損傷されることであり、例えば、骨折、捻挫、打撲、挫傷、肉離れなどがこれにあたる。もう一つはスポーツ障害で、比較的長期に繰り返される過度の運動負荷により生ずる、筋、腱、靱帯、骨、滑膜などの慢性炎症性変化のことをいう。そのため、スポーツ障害は、オーバーユース（使いすぎ）症候群ともよばれる。関節にかかる力学的負荷には、伸張と圧縮、剪断、回旋などがあり、これらの力が関節に加わり、関節周囲の筋、腱や靱帯などの軟部組織にストレスがかかることで、組織の破断などの外傷・障害が生じる。また、いわゆる knee-in & toe-out や knee-out & toe-in とよばれる静的および動的アライメントの異常も、関節周囲組織のストレスを増大させる要因となり、スポーツ外傷・障害の発症を助長する。

成長期の運動器の特徴としては、以下の点が挙げられる。まず、骨の長さの成長は、成長軟骨組織が存在する骨端線による活発な骨形成により行われているが、成長期ではこの骨端線が閉鎖しておらず、骨の成長途上であるということである。次に、身長増加と筋の成長にアンバランスな時期（13 歳前後）があり、骨に対する筋の相対的な短縮により柔軟性の低下が生じ、腱の付着部などに牽引ストレスがかかる場合があるということである。また、身長増加のピークと骨量（骨密度）の増加にもギャップがあり、成人と比較して骨の強度が不十分ということがある。したがって、これらの部位にトレーニングなどによる過度の力学的負荷がかかった際にはウィークポイントとなり、骨端線の離開、軟骨の変形、過剰骨の形成などの種々の障害が発生する。以下に、成長期に多くみられる外傷・障害の例を挙げる。

肘関節では、まず、上腕骨離断性骨軟骨炎があり、骨が未熟なときに過度な投球を繰り返すことで生じる。進行すると骨軟骨が離断・遊離し、肘外側の疼痛などで肘を伸ばすことができなくなる。また、肘関節内側側副靱帯損傷はリトルリーグ肘とも呼ばれ、投球などによる内側側副靭帯の伸張ストレスにより、上腕骨側の靱帯付着部の剥離骨折を伴うことがある。両者ともに少年野球の投手に多くみられる。肩の障害には、インピンジメント症候群などがある。オーバーハンドスロー、水泳の自由形などで繰り返し肩関節を動かすことにより、烏口肩峰靱帯に腱板や上腕二頭筋長頭腱が繰り返しぶつかること（インピンジ）が原因となる。投球肘、投球肩の発症要因の代表例として肘下がりの投球が挙げられる。後期コッキング期において、投球側の肘が両肩を結んだ線よりも下方に位置するような投球動作をとる場合、肘や肩の関節周囲の筋、腱、靱帯に過大な伸張ストレスが加わる。肘下がり動作の原因を明らかにするためには、上肢の動きのみではなく、身体の軸の位置や体重移動の仕方などの一連の投球動作を通じたチェックが必要である。

下肢では、脛骨過労性骨障害（シンスプリント）がある。これは、下腿後面内側の筋群（ヒラメ筋、長趾屈筋、後脛骨筋）の牽引により、脛骨骨膜に損傷や炎症をきたした結果生じる。下肢のアライメント異常（knee-in & toe-out）で生じやすく、また、陸上競技のトラック種目では左回りの周回をとるため、下腿後面内側の筋群の牽引力が増大することから、トラックの内脚（左脚）で生じやすいといわれる。膝のスポーツ障害の例としては、膝蓋腱炎、Osgood-Schlatter 病、有痛性分裂膝蓋骨などが挙げられる。これらの障害は発症機序が共通しており、いずれも大腿四頭筋のオーバーユースによるものである。膝蓋腱炎はジャンパー膝とも呼ばれ、膝伸展の主動筋である大腿四頭筋の過度の使用により筋のスティフネスが増大することにより発症するもので、膝蓋の下部にある膝蓋腱に伸張ストレスがかかり痛みを生ずる。Osgood-Schlatter 病は 11 ～ 13 歳頃の男子スポーツ選手に多くみられるもので、発症機序は膝蓋腱炎と同様であるが、骨端線の閉鎖が済んでいない成長期では膝蓋腱付着部（脛骨粗面）の骨がはがれて骨片が形成されることにより起こる。有痛性分裂膝蓋骨は 10 ～ 12 歳をピークに発症し、大腿四頭筋の牽引力

が繰り返し膝蓋骨に加わることにより、膝蓋骨の上外方部の骨が２～３に割れた状態を呈する。

腰部では、腰椎椎間板ヘルニアがあり、これは、腰椎間を連絡する椎間板にスポーツ活動などによる外力が加わることで、椎間板内の髄核が後方に飛び出して神経根を圧迫し、坐骨神経痛が生じるものである。また、腰椎分離症は、腰部を用いた過度なスポーツ活動が原因の疲労骨折で、椎弓部分の骨折による椎弓と椎体の分離が生じることにより起こる。男女とも 14 歳頃に発症ピークがあるが、比較的男子に多い。また、腰椎分離すべり症は、分離症により椎体の過可動性が生じ、椎体が前方にずれてしまうことにより起こる。12 歳以下では分離症後にすべり症を併発する場合が多く、初期段階でスポーツ休止、体幹装具による固定で骨癒合を目指す治療を行うべきである。

平成 21 年 11 月 5 日
体育とスポーツについて

体育学部体育学科 准教授　深見 英一郎

語源について

「体育」の語源は、イギリスのＨ．スペンサーが提唱した三育主義（Intellectual Education、Moral Education、Physical Education）であり、明治９年に近藤鎮三が「Physical Education」を「体育」と翻訳した。一方で、「Sport」の語源は、ラテン語の「deportare（気晴らし、休養、楽しむ）」である。スポーツとは、一般にサッカーやバレーボールなどの競技スポーツを指すが、他にも「娯楽、楽しみ、冗談」などの意味がある。イギリスのスポーツ社会学者マッキントッシュは、スポーツという言葉が、ゲーム、気晴らし、狩猟、闘争など、あまりにも広く、深く人間の生活とかかわりあっているので、「スポーツ」という言葉を定義づけることは困難であると指摘している。

体育とスポーツのイメージ比較

近年、日本において体育・スポーツ系大学が増加している。これは、人々の運動・スポーツに対するニーズの拡大と、それに関わる指導者やコーディネーターを養成する機関の必要性が高まっているからである。体育・スポーツ系大学には２種類の名称があり、大学（学部）名に「体育」を用いる大学と「スポーツ」を用いる大学である。たとえば、前者には、天理大学体育学部、大阪体育大学、日本体育大学などがある。後者には、びわこ成蹊スポーツ大学、同志社大学スポーツ健康科学部、早稲田大学スポーツ科学部などがある。前者と比較して、後者は比較的新しく設立された大学（学部）名であることがわかる。最近、新設された大学（学部）が「体育」ではなく、「スポーツ」という名称を採用した理由は、スポーツに対して「誰からも強制されず、自由で、楽しい、さわやかな活動」という好ましいイメージを抱いたからであろう。一方で、体育に対して「学校という規律ある場で、教師の笛と指示に従って運動を行う」という好ましくないイメージを抱いたからではないか。それでは、「体育」大学と「スポーツ」大学のそれぞれの指導内容（カリキュラム）に明確な違いがあるかといえば、どちらも体育・スポーツを総合的に学ぶことができ、保健体育の教員免許も取得することができるなどのように両者に明確な違いはない。

体育とスポーツの用いられ方

今日の大学は広く世界中から学生を呼び寄せようと、インターネットでカリキュラムや学生生活に関する情報を発信している。ここでは、外国人が混乱しないように、より実体に即した形で英語表記されている。たとえば、天理大学体育学部は、Faculty of Budo & Sport Studies、大阪体育大学は、Osaka University of Health & Sport Sciences などと、多くの体育系大学では日本語表記には「体育」を用いているのに、「Sport」という表現を用いているのである（筑波大学体育専門学群、東海大学体育学部など一部では「Physical Education」を使用）。また、他の「体育」の英語表記をみると、国内最大の総合スポーツ競技会である「国民体育大会」は「National Sports Festival」、日本各地で様々な健康・スポーツに関するイベントが行われる「体育の日」は「Sports & health day」と紹介されている。

なぜ体育ではなくスポーツか

このように、今日、「体育」ではなく「スポーツ」という言葉が用いられるようになった主な理由には、次の３つがあると考えられる。１つは、「体育（Physical education）」という名称がもつ心身二元論の意味合いを払拭するためである。体を鍛えて、多くの技術が習得できても、それだけで試合には勝てない。心身共に充実が図られなければ、ここ一番の大事な試合で最高のパフォーマンスを発揮することはできないからである。２つ目に、今日では健康や豊かな生活のため、国民のスポーツ需要が拡大し、不可欠な生活文化となった。そのため、スポーツ能力の育成が大切な教育的課題となったからである。３つ目は、現実の体育授業や国民体育大会の「体育」は、スポーツ中心で行われているからである。

平成 21 年 10 月 11 日
柿本人麻呂　ー山辺道をめぐってー

文学部国文学国語学科 教授　川島 二郎

柿本人麻呂は、七世紀末から八世紀のはじめにかけて、持統朝を中心に天武朝から文武朝に活躍した宮廷歌人である。平安時代の『古今和歌集』の仮名序においては「歌の聖（ひじり）」と称えられ、現今に至るまで歌聖としての讃仰をうけ続けている。

柿本氏は、『古事記』等に拠ると、第五代孝昭天皇の第一皇子の後裔であり、和邇（わに）氏（後の春日氏）を筆頭とする一族中の一氏族である。その和邇氏は、山辺道に沿った今の天理市和邇の地を根拠地とした。柿本氏についても、その和爾の地に柿本寺あるいは人麻呂塚（歌塚）が存在したことが確認できる。そして、人麻呂は山辺道にかかわる作品を残しており、たとえば、枕詞「子らが手を」（愛しい妻の手を手枕とする意）を冠して詠まれる三輪山東北の「巻向山」は、ほとんど人麻呂によってのみ歌われる地である。よって、山辺道、和爾の地を人麻呂の本貫と考えて間違いなかろう。

人麻呂の山辺道にかかわる代表的な作品としては、たとえば、つぎの二首をあげることができる。

①娘子（をとめ）らを袖布留山（そでふるやま）の瑞垣（みづかき）の久しき時ゆ思ひけり我（わ）れは　（巻 11　二四一五）
②娘子（をとめ）らが袖布留山（そでふるやま）の瑞垣（みづかき）の久しき時ゆ思ひき我（わ）れは　（巻４　五〇一）

国宝の七支刀（ななつさやのたち）等で著名な石上神宮の瑞垣（みづかき）（神社の神域の周りにめぐらされた垣根）を題材とした類歌である。「娘子（をとめ）らを（が）袖」は、地名「布留山」の「布留」を袖を振る意の「振る」と見なして「布留山」を導き出す序詞であり、さらに「娘子（をとめ）らを（が）袖布留山（そでふるやま）の瑞垣（みづかき）の」は、石上神宮の「瑞垣（みづかき）」がいにしえから変わらずあることから「久しき時ゆ」（ずっと前から長い間）を導き出す序詞である。いわゆる二重の序詞であり、上の序詞に描かれている「娘子」の姿と袖振り（愛情表現）の行為が下二句の恋の思いを裏打ちしている。そこに、人麻呂の修辞の冴えを見ることができる。

ただし、二首にはっきりとした相違点があることを、看過してはいけない。①の「娘子（をとめ）らを」であると、「を」は動作の対象を示し、男が娘子に対して袖を振っており、②の「娘子（をとめ）らが」であると、正反対に娘子が男に対して袖を振っている。また、①の「思ひけり」では、昔から今の今まで娘子のことを思い続けてきたことが詠嘆をこめて回想されており、②の「思ひき」では、自らのかつての娘子への思いが、じっくりとかみしめられ詠嘆されている。①においては、自らの袖振りの行為とそれにかかわって今に至りあらためて自覚したこれまでの娘子への思いが歌われ、②においては、娘子の袖振りの姿をくっきり描きつつ娘子へのかつての思いを見据えて歌われている。

さらに、②については、留意すべきことがある。実は、②は「柿本朝臣人麻呂の歌三首」の第一首であり、つぎの二首が続く。

③夏野行く小鹿（をしか）の角の束の間も妹（いも）が心を忘れて思へや　（巻４　五〇二）
④玉衣（たまぎぬ）のさゐさゐしづみ家の妹に物言はず来にて思ひかねつも　（巻４　五〇三）

③では、夏の鹿の短い角から「束の間」を導き出し、ほんの短い間も愛しい妻のこと忘れないと誓われている。④では、旅立ちの物せわしいざわめきが静まった（「玉衣のさゐさゐしづみ」）後の、家に残して来た妻と充分に言葉を交わせなかった心残りが嘆かれている。つまり、②の「久しき思い」（逢い得ての思い）に続けて、③では「忘れざる思い」（逢って後の思い）、④では「たえがたき思い」（旅に別れてある思い）が詠まれており、恋の思いの三態がそれぞれ詠まれている。②は、そういった連作の第一首として鑑賞すべき歌であると言える。

以上、山辺道にかかわる二首を見ただけであるけれども、そこには、歌人人麻呂によって凝らされた丹精をはっきりと見て取ることができよう。

第１回　平成 22 年５月８日
ストレスと上手につきあうためには　ー臨床心理学の立場からー

人間学部総合教育研究センター 講師　仲 淳

本講座では、臨床心理学の立場から、人とつながり合って共感的に理解し合うことが、日常のさまざまなストレスをしのいでいくための一つの力の源になるということを、講義とワークによって実感的に理解していただくことを目的としました。

講義では、まず参加者の方の軽い心と体ほぐしを行いました。最初に心理学の分野では有名なルビンの盃という錯視図版を見ていただき、ものの見方は一通りではなく、違った視点から見ることで同じものでも全く違ったものに見えてくるということを説明しました。そして続けてジャンケンで後出しをして相手に勝つという場合と相手にわざと負けるという二つの動作をしていただいて、私たちには「負けるよりも勝つ」という一定のスタイルが知らず知らずのうちに身についてしまっているということを体感していただきました。

心と体ほぐしの後で、「ストレスとは一種の緊張状態であること」、「適度なストレスは生活に張り合いを与えてくれるが、過度なストレス状態が続くと様々な心身の失調が生じる可能性があること」を説明し、参加者の方にはストレスチェックシートでご自身のストレス状態をチェックしていただきました。

次に「臨床心理学は大きな心理的ストレスのために伸びきってしまったり、へこんでしまったり、穴があいてしまった心の治療について考える学問である」ことを説明し、実際のカウンセリングルームの写真や箱庭療法のセットの写真などを見ていただきながら、「守られた環境の中で人とつながって自分を表現していくことは心の開放につながること」、「他者との心理的な共感によって人は心のエネルギーを取り戻すことができる場合があること」、「心にあそびを取り戻すことによって日々のストレスをしのいでいくことが可能になってくること」などについて解説させていただきました。

後半は参加者の方に３つのワークを体験していただきました。

一つ目はあいこじゃんけんのワークで、講演者とじゃんけんをしていただいて、あいこになれば勝ちというルールで、いつものじゃんけんとは少し違う、「人と同じになったらいい」という体験をしていただきました。競争社会・格差社会ということがいわれている今日において、私たちは敵対したり相手を出し抜いたりということを意識しがちなのですが、人と気持ち（息）を合わせるということも意外に面白いということを体験していただきました。

次に３人一組で「交互色彩分割法」という描画療法の一つをみなさんに体験していただきました。一枚の画用紙をサインペンで自由に仕切ってもらい、順番に一マスずつ色鉛筆で色を塗って、最後に全体として一枚のステンドグラスの模様のようなものが仕上がるというもので、参加者の方に色を介したやり取り（コミュニケーション）を味わってもらいながら、みんなで協力して一つのものを仕上げるという競争ではない「共創」の楽しさを体験していただきました。

最後に先ほどと同じグループで、相手の背中に触れるだけでその人の気持ちを感じ取るという共感のワークをしていただきました。グループの最初の人には「うれしい」か「悲しい」のどちらかの気持ちになりきっていただき、次の人は最初の人の背中に手で軽く触れて前の人がどちらの感情を感じていたのかを感じ取ってもらい、今度は自分がその感じ取った感情になりきってもらって、また最後の人に感じ取ってもらうというやり方で、一種の「感情のリレー」をしていただきました。みなさん初対面の方同士というグループがほとんどでしたが、うまく最後まで伝わることもあって、和気あいあいと楽しげに取り組んでいただき、人との触れ合いや共感によって親睦が生まれ、不思議な生きる力が湧いてくるということを少なからず実感していただけたようでした。

時間の制限と参加者数が非常に多かったということがあり、予定していたグループで日々の思いをシェアしていただくワークなどができなかったことが今後の課題として残りました。

第２回　平成 22 年５月 15 日
ストレス対処法としての運動・スポーツ

体育学部体育学科 講師　西田 円

ストレスとは

「ストレス」という言葉は、本来は「歪み」を表す言葉です。ボールを手でぎゅっと握ったときに変形する様子を思い描いてください。「手」がストレッサー（ストレス要因）となってボールを変形させた、つまり、ストレッサーによってストレス反応が起きたということです。「手」の力が弱ければ、ボールは変形しません。逆に強ければ大きく変形します。つまり、ストレッサーの強さによって、ストレス反応は異なります。

私たちの生活に当てはめて考えてみましょう。まず、何らかのストレッサーを受けます。例えば、仕事、子育て、騒音など、それが自分にとって重要なことか、影響することかといった評価を行ないます（一次的評価）。そこで、YES と評価したならば、次にそのストレッサーの原因や解決策を理解しているか、また、対処できる自信があるかといった評価を行ないます（二次的評価）。評価が NO であった場合、不安、イライラ、落ち込み、胃痛などのストレス反応が起きます。

ストレスに強い人・弱い人

ストレスに強い人と弱い人が存在するのはなぜなのでしょうか？実は、ストレス耐性には個人差があるのです。困難な状況にもかかわらず、うまく適応できる力を「レジリエンス（Resilience）」といいます。ストレスに強い人は、このレジリエンスが高いということになります。

レジリエンスと深い関係にあるのが自尊心。自分は劣っている、自分のことが嫌いと思って過ごしていると、自己に対する評価（自尊心）が低くなります。すると、レジリエンスも低くなってしまいます。自尊心を高める、つまり、自分自身に興味をもって、自分自身を好きになることが大切なのです。

ストレスに対する運動の心理的効果

運動がストレス対処法として有効であることは、皆さんもご存知だと思います。では、具体的にどのような効果があるのでしょうか？

運動の心理的効果として挙げられるのは、不安感、緊張感、抑うつ感、疲労感などの減少です。精神的なストレスを受けた後は、単に安静にしているよりも軽い運動をした方が、活動性（元気や充実感）も高まります。

ストレス除去よりも大切なこと

では、ストレスは皆さんの人生にとって健康を害するだけのもの、不必要なものなのでしょうか？ストレスを感じていても輝いている人もいます。逆に、ストレスをそれほど感じていなくても輝きを失っている人もいます。適度なストレスは、時に人生のスパイスとなることもあるのではないでしょうか。

輝かしい人生に不可欠なのは、ストレスのない日常ではなく、「生きがい」です。今回の公開講座では、「ストレス度」と「生きがい度」という２つの次元でこころの健康状態を捉えた「精神的健康診断パターン検査」（株式会社トーヨーフィジカル発行）を実施しました。こころが健康であるためには、「ストレス」だけでなく「生きがい」という面からも改善の方策を探ることが大切です。

生きがいのある毎日を送ることができれば、自分自身のことも好きになり、レジリエンスが高くなることで、不快なストレッサーにもうまく対処できることでしょう。

第３回　平成 22 年５月 22 日
現代中国社会とストレス　ー中国の地域精神保健サービスの現状と課題ー

国際学部地域文化研究センター 講師　関本 克良

ストレス社会を国際的な視点で考えるために、今回は中国の地域社会を窓口にしました。

まず中国の地域に根ざした精神保健サービスの現状を事例として報告しました。このサービスの特徴は、中国の地域社会の住民組織がサービスの実施に深く関わっていることです。中国の末端の住民組織は、日本の町内会を数個合わせた程の規模（北京で約 3000 戸）で、そこで働く委員は現地住民の中から選挙で選ばれる実質的な公務員です。天理市の人口を約 25000 世帯とすれば、中国的な住民組織が約８箇所存在し、それぞれ選挙によって 10 名弱の委員が選出されます。このように、地元住民が選挙によって選ばれた公務員として地元住民へのサービスを担っていくシステムができあがっています。

講師が主張する中国の地域サービス提供の特徴は３つあります。１つ目は、地元住民の個々のニーズが詳細に集約されて、委員が個別に対応していること。実際、中国の精神保健サービスの提供では住民組織の担当者が患者家庭を巡回して服薬、リハビリや就職活動を支援する取り組みがなされています。２つ目は、ボランティア活動が活発であること。住民組織内でボランティア登録を行い、個人的ニーズがあるところにボランティアを派遣します。個人的なニーズにボランティアで対応するには、コーディネートする担当者の管轄範囲が無理なく適切である必要があります。３つ目は、サービス提供において資格要件を厳しく問わない傾向です。精神保健を担当する住民組織内の担当者は、地元の住民であって有資格者ではありません。必要な知識と技術は、資格を有する上級の行政担当者が定期的に研修会を開催することで提供していきます。こうした研修制度の充実によって、地元住民が様々なサービスを提供する仕組みを作っているのです。

講座では、参加者の皆さんにグループワークをして頂きました。マインドマップをまねた手法で、「ストレス社会」「理想の地域社会」を図に表して頂きました。「ストレス社会」のマップには「人間関係の困難さ」「情報過多」「ゆとりのなさ」「多忙」「差別」「経済不安」などが書かれていました。「理想の地域社会」のマップには「思いやり」「助け合い」「あいさつ」「ボランティア」「共感」「相手の立場に」という言葉が目立ちました。「ストレス社会」をいかに「理想の社会」に切り替えることができるでしょうか。

更に参加者にアンケートを実施しました。20 代から 80 代の計 12 名の参加者に伺いました。一方で「地域社会がもっと関わって助け合いをするべき」には肯定的な人が９名、中立が２名、否定的な人が１名でした。他方で「自分の家庭の悩みや困っていることに他人が関わってもらいたくない」には、肯定的な人が７名、中立が１名、否定的な人が４名ありました。講座の参加者は、地域社会の住民は助け合いをするべきだけれども、自分の家庭の問題に他人が関わってもらいたくないと考えていました。地域社会の助け合いに、プライバシーの確保がいかに重要であるかを示していると思います。家庭の問題に他者が円滑に関わるために、学校教育や社会教育の場において、個人情報の大切さや人権意識を高める学習が大変重要であると考えています。これは中国の地域サービスにも当てはまる問題点です。

参加者のお一人から、情報化された現代社会では地域社会の関わり以外でも人間関係が形成されているという指摘をいただきました。確かにその通りかもしれません。しかし、今回はストレス社会を解消する一つの手段として、地域社会のあり方と、住民同士が関わり合う仕組みを工夫することを提案しました。中国と全く同じ仕組みをつくる必要はありません。しかし、量的に限られた専門家が、ストレスに関連する個別のニーズに全て対応することができるでしょうか。また、地域住民がお互いに関わり合いをもつことなしに、地域社会でのストレスに関連する問題を解消することができるでしょうか。今回の講座が、地域社会のあり方を考えるきっかけになれば幸いだと考えております。どうもありがとうございました。

第４回　平成 22 年５月 29 日
困難を超えて生きる　ー障害者の生活体験から学ぶー

人間学部人間関係学科 教授　山田 明

はじめに

ストレスにどう対処するかは人生の方向を変えるだけの重みをもつ

１．蓄積されたつよい心的外傷と心の基地（母港）を築けない人生

畠山鈴香の幼児期はごく普通の子どもとして野山で楽しく遊んでいたが、小１の担任の不用意な発言を機にいじめられる学校生活が高校まで続く。この不適応には家庭内での親子関係が関係していると鎌田慧さんのルポ『橋の上の「殺意」』（岩波書店、2009 年）は指摘する。アル中気味の父は小学生の鈴香を平手打ちし、髪を引っ張り、足蹴にした。機嫌が良い時でも突然怒り出すこともめずらしくなかった。

高校卒業後いくつかの職を転々として 21 歳で結婚、やがて長女彩香を出産、７ヵ月後に離婚した。

ひとりになった鈴香は職を転々とし、休みがちになって解雇。雇用保険、生活保護で暮らしながら娘を育てた。娘が３年生になって学校でのいじめが表面化した。ヘルパー２級の資格をとったが採用されず、生活の見通しがもてず、薬の大量摂取による自殺を図った。肉体疲労と精神的混乱の状況下で 2006 年４月に長女彩香が水死体で発見、事故死と認定される。１ヵ月後に隣家の豪憲君が行方不明、死体発見、鈴香逮捕と進む。裁判過程で長谷川臨床心理士の発達障害、解離性障害などの意見書却下、中島鑑定医の複合的な精神障害との鑑定がされるが、2009 年無期懲役判決、被告が上告取り下げで確定した。いじめと暴力の中でコミュニケーション能力、情緒不安定で、家事能力、社交などのソーシャルスキルを身につける機会がもてないまま結婚、離婚、母子家庭として「最低生活」をおくる。身体を病み、心を病み、薬に頼って孤立して辛うじて生きている状態で、このストレスに対処するコーピングも形成されていない。

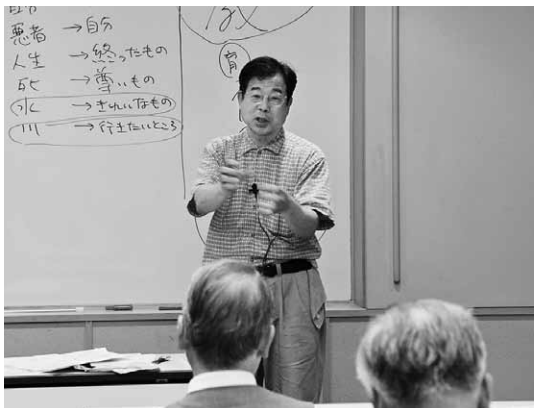
２．わたしの出会った人たちー困難を越える人ともつれる人

（１）中途失明の A さん

６人きょうだいの末子で唯一の男子として期待を集めて育ったが高校生時に失明、鍼灸院自営、結婚、離婚、廃業、施設入所。他の入所者とのトラブル、職員との対立、自殺未遂などがあり、施設生活に不適応度が強まっていく。愛情経験、達成経験、満足経験の質量の不足が円満で十分な着火を準備できない要因となっていると思われる。

（２）交通事故による頚髄損傷の B さん

B さんは自動車運転中に転落事故を起こし、頚髄損傷、施設入所となる。夫や父母が子どもを連れて頻繁に施設を訪れ、B さんも一時帰宅する。生活動作機能は失ったが、家族の一員としては機能し、そのことがリハビリに向かう意欲を支えた。やがて仏壇に手をあわせる時のように両手掌部でペンを持って字を書き、さらに絵筆を持って絵を描くようになった。受傷後も建設的で現実的な努力と社会的評価、承認を得ながら進み、社会的役割、家庭内役割を担って日々が、年が重ねられている。



３．困難をかかえて生きる

（１）３つの力

聖書に３つの力の記述があるという。その第１は直面した困難の内容を冷静に見極める知恵、第２は困難に挑戦していく勇気、第３は忍耐力。R.S.Lazarus らのストレス心理学研究によると、侵襲してきたストレッサーに対して第１段階では認知的評価が大事であり、そこにはさらに一次的評価としてストレッサーからのディマンドの内容の認知があり、二次的評価としてそのディマンドが自己のコーピングでコントロール可能かどうかの認識が必要であり、そのうえで対処（コーピング）が働くとしている。

（２）Life の３つの構成要素

国際障害者リハビリテーション協会 1980 年代憲章は障害者の Life 人生に欠かせないものとして、「love and be loved」「work and create」「learn and grow」の３つをあげる。愛し愛される人間関係を幼少時から成人後まで多様な形でもつことが人生の一方の脚部であり、働く、作り出す対象世界を常にもつことによって立案や工夫や実行努力を継続し、やがてその達成感と反省点をもって次の段階の達成をめざして再出発する。これが人生のもう一方の脚部であり、この２本の脚の上に胴体と頭が乗っている。この胴体や頭部になるのが学び、成長することを実感できる自己実現であろうか。

人生は多くの困難に直面するものであり、ソーシャルサポートがなければ個人の力だけで越えて行けない場合がある。困難を越えていく経験を一つずつ積み上げることでコーピングスキルが高まり、また困難の質量を冷静に見極める力がついていくのであろう。

第５回　平成 22 年６月５日
生きる意味を見いだす　ー臨床人間学の視点からー

人間学部宗教学科 教授　澤井 義次

現代のようなストレス社会において、生きる意味を心の深層から見いだすことは、私たちにとって、より良く生きる力となる。ここでは、いまここに生きていることの意味について、臨床人間学の視点から捉えなおしてみたい。

そのまえにまず、臨床人間学の視座について少し述べておきたい。現代社会では、生きることの意味を見失っている人々があまりにも多い。従来の哲学的人間学では、現代社会に山積している諸問題をあまり考慮することなく、人間存在のあり方を考えてきたきらいがあった。ところが、臨床人間学はまさに現代社会の要請にもとづき、従来の哲学的人間学の枠を超えて、宗教学、社会学、心理学、哲学などの諸学問領域と関わりながら、いわば学際的な視座をもって、現実の諸問題に対処しようとする。

さて、ストレス社会の構造を理解するためには、現代の社会および家族の主要な特徴を把握しておく必要がある。現代は「ポスト高度成長」社会であるといわれるが、現代の社会構造を分析するとき、そのおもな特徴として匿名性、流動性、利便性、地域コミュニティの脆弱性がある。またそうした社会状況の中で、現代家族は閉鎖性と母子の孤立によって特徴づけられる。このように人と人の日常的なつながりが希薄になっている。戦後の日本社会では、個々人は自由な生き方を選択し、多様な価値観を認めてきたが、その反面、家族関係や地域とのつながりなど、他者とのつながりを軽視してきたきらいがある。したがって、社会学者の渡辺秀樹が論じるように、「少子高齢社会の進展の中で、サポートネットワークとしての日常的なつながりを作り出すことは、いっそう重要な課題となっている」（岩上・渡辺他『いま、この日本の家族－絆のゆくえ－』弘文堂、2010 年、45 頁参照）。

現代社会の状況は家族のあり方を揺るがしている。家族の絆など、絆の重要性がしばしば取り上げられる。ところが、「絆」とは本来、馬・犬などをつなぎとめる綱を意味していた。その漢字を「きずな」と読めば、それは「断とうにも断ち切れない人の間の結びつき」を意味する。しかし、その漢字を「ほだし」と読めば、「自由を束縛するもの」を意味し、全く違った意味をもつ。臨床心理学者の河合隼雄は「現代における家族の意義」という論考（河合隼雄他『家族はどこへいくのか』岩波書店、2000 年、２－４頁）の中で、次のように論じている。「最近になって、特に先進国においては、家族を「しがらみ」として感じる人が多くなったことは事実である。その一つの反映として、結婚を拒否したり、願望をもたない人が増加してきている現象がある。これは現在日本の課題である少子化にもつながっている」。家族あるいは様々な人間関係をネガティブに感じるようになれば、それはストレスになっていく。

現代のストレス社会の中で、生きる意味を見いだすために、臨床人間学が提示しようとする新たなパースペクティヴは、「無意識」すなわち意識の深みである。意味論的にいえば、フロイトやユングなどの心理学者が説いた「無意識」は、哲学者の井筒俊彦が言う「コトバの意味生成の生きた場」（井筒俊彦『意味の深みへ』岩波書店、1985 年、200 頁）である。私たちの生の意味世界は二重性を特徴としている。すなわち、日常的な意味世界と非日常的（スピリチュアル、あるいは宗教的）な意味世界である。心の表層部分は日常的な意味世界に対応し、心の深層は非日常的な意味世界に対応している。心が表層から深層へ深化するにつれて、存在の深みが少しずつ開けていく。

いまここに生きていることの意味を心の深みから掘り下げて理解するとき、これまで当たり前と思われた「生きている」ことが当たり前ではなくなり、生かされている喜びへと意味転換されていく。このことが自覚されるにつれて、おのずとものの見方が少しずつ変化していく。人生には幾たびか、節目がある。そうした節目では、それまでの生き方を変えていかねばならない。河合隼雄はみずからの心理臨床の経験から、「心の健康のことにかかわっていると、健康の「維持」というよりは、「成長」「発展」ということを感じさせられる」（河合隼雄『対話する人間』講談社 α 文庫、247 頁）と述べている。河合が論じているように、いま抱えているストレスを心の深みからとらえなおし、それまでの生き方を転換していく。それにつれて、生きることの新たな意味を理解し、なお一層、心の「成長」を遂げることができるであろう。

第１回　平成 22 年６月 12 日
オーストラリアの文化多元主義　ー言語政策と個人のアイデンティティの動揺ー

国際学部言語教育研究センター 准教授　櫟本 崇恵

オーストラリアは英領連邦（コモンウェルス）と称される国々の１つで、植民地時代には、先住民が圧倒的少数で、英国の支配層が上に乗っかった植民地であった。この「新世界国家」の辺境エートスは「メイトシップ」（以降、オーストラリア式発音でマイトシップと表記）と呼ばれている。「マイトシップ」は、イギリスからの流刑囚の官憲から保身するという性質が色濃かったため受動的で、人口集中が際立つアジアから有色人種が流入することを防ぐ「白豪主義」へと発展していった。マイトシップは、平等主義の精神の祖型を形作り、最初はそれらが英国系同士の間に広まり、さらには差別されていたアイルランド系が英国系に抗議する形で彼（女）らの間にも広がっていった。

しかし、はるか大西洋とインド洋を隔てたオーストラリアへは、移民の到来が非常に少なく、人口が密集しているアジア地域と比べて、オーストラリアは常に人口の希薄感に悩まされ、それらが彼（女）らの受動性をいっそう強めた。その受動性から「白豪主義」がはびこり、保守のフレーザー政権が 1970 年代半ばに公式に廃棄を宣言するまで続いた。

その後、第二次世界大戦で日本軍の侵攻に怯えたオーストラリアは、人口増を目指して英国やアイルランド以外のヨーロッパ諸国から、さらには中東、アジア、南米などからの移民や難民を受け入れて、小型の多民族社会を形成していくこととなる。1970 年代半ば、保守のフレーザー政権が、オーストラリアは文化多元主義を国是とすることを宣言すると、「マイトシップ」の輪が英国系やアイルランド系以外の民族集団にも拡充され、最終的に「白豪主義」の終焉を迎えるに至ったのである。

それ以降、オーストラリアは移民によって国家を構築していく、いわゆる「移民の国」と称されるようになった。新来の移民への対応には常に特別な意味があり、時代変化と共に政策理念が色濃く反映されている。オーストラリアのマルチカルチュラリズムに基づく政策は、移民に対して第二言語としての英語教育（English as a Second Language: ESL）を充実させようと努めている。この場合の第一言語とはまさしく移民の母語のことで、マルチカルチュラリズムの理念どおりにそれを尊重しつつ、オーストラリア国内において就業上の不利益をこうむらないように第二言語としての英語の学習を奨励しているのである。

それと同時に、オーストラリアの言語政策で特徴的なことは、英語と英語以外の言語（Language Other Than English: LOTE）との間の相互補完性を、マルチカルチュラリズムの根本的な理念として重視していることである。マルチリンガリズムを正当化する理由として、平等の概念、人的資源、経済活動および外交面での効用が挙げられる。具体的な考え方として、まず英語をオーストラリアの国家語として定め、国内においては英語の運用能力が不可欠であるとの認識を示した。次に、移民と先住民の言語を国家の「資源」として尊重し、それらが維持されるよう努めることを明確にした。また、英語以外の言語のうちから少なくとも一言語が全てのオーストラリア人によって学習されるべきであるとの見解を示した。これらのオーストラリアの言語政策に基づけば、英語しかできない人たちも英語以外の言語の学習が奨励される。このことは彼（女）らが多様な文化を享受することで、多民族国家のあり方を意識化することに少なからず影響を与えることになる。

筆者がオーストラリアで知り合ったイタリア系のオーストラリア人は、いつ見てもイージーゴーイングのイタリア人そのものであった。てっきりこの人はイタリア語が最も得意で、補助的に英語を話すのかと思っていたが、実際にはオーストラリア移民の第二世代ということもあり、最も得意なのは英語で、イタリア語はさほど上手くない

ということであった。外見からその人が話す言葉を判断することは出来ないのである。

オーストラリアで使用されている言語についての調査によると、イタリア語は英語以外の言語では常に上位を占めている。とはいえ、イタリア系オーストラリア人の中でもイタリア語が上手な人とそれ程でもない人に分かれるという現実がある。私が出会った先のイタリア系オーストラリア人には悩みがあり、オーストラリアではどうしてもイタリア人と見られてしまうが、両親とイタリアへ里帰りした時など純粋なイタリア人に見られないということである。オーストラリアとイタリアの両方で疎外感があるという。

バイリンガルであるということにナショナリティを絡めると、個人のアイデンティティの動揺が生じることがよくある。これはオーストラリア人に限ったことではなく、世界中でよく聞く話である。アイデンティティという問題に関連して、この人にとってイタリア語は第一言語なのかそれとも第二言語なのかという疑問が生じる。第一言語とはたいてい母語のことを指し、やむを得ない事情によって第二言語を付加的に身につけるものである。

オーストラリア言語事情をさらに複雑にしているのは、個人の出生地における言語状況や両親の言語使用の影響を受けて、３ヶ国語以上の言語を話す人たちの存在である。つまり、現代オーストラリア社会におけるイタリア系の人々ということで一括りにすることが出来ないという面がある。特に言語と文化は密接不可分であり、またそれは個人的なアイデンティティをめぐる問題と通底するところがあるという認識が求められよう。

【参考文献】

越智道雄『オーストラリアを知るための 55 章』第 2 版、明石書店、2005

第２回　平成 22 年６月 19 日
ことわざで学ぶ韓国・朝鮮語　ー先人たちの健康への気遣いー

国際学部外国語学科 教授　松尾 勇

日本のことわざ「病は口から」という言葉に対して、韓国では「밥이 약보다 낫다（ご飯は薬より優れている）」ということわざがある。薬を飲むよりも食べ物をしっかり摂(と)ったほうがよいという意味である。韓国における健康のキーワードは、「補薬(ポーヤク)、食治(シクチ)、薬治(ヤクチ)」である。上のことわざは薬治よりも食治を勧めているのである。過日、韓国旅行にいざなう次のような新聞広告が目に留まった。

「食事を補薬(ポーヤク)と考える国で料理を楽しまれたことがありますか？」（「毎日新聞」2010 年５月 30 日号）

補薬とは、漢方薬をいう。比較的容易に入手できる漢方薬といえば、われわれには高麗人蔘とか朝鮮人蔘という名でなじみの深い人蔘がある。高価な薬材としては鹿の角である鹿茸(ろくじょう)などがある。これなども耳にされたかもしれない。ちかごろは日本でも人蔘茶はもちろんのこと蔘鶏湯（サムゲタン：若鶏の内臓を取り出したあとに朝鮮人蔘や棗(なつめ)やもち米などを詰めて煮込んだ料理）のようなものもかなりよく知られるようになってきた。これらは韓国において漢方薬が生活化していることを物語っている。韓国では昔から薬令市といって、地方の主要な都市で春と秋に薬材の市が立った。現在のソウルでも薬材専門の市場がある。ぜひじかにご覧になって人々の健康への関心の高さを実感していただきたい。

やはり、食べ物が健康にとってもっとも大切だということわざに次のようなものがある。

「보식（補食）이 보약（補薬）보다 낫다（薬で補身するよりも食べ物で補身するほうが優れている）」

補身(ポシン)というのは、強壮剤を飲んだり栄養価の高い食品を食べて身体を強健にすることをいう。日本では「一に看病、二に薬」という。薬に頼りすぎることを戒めるのはいずれも同じである。

過食を戒め少食を勧めることわざに、日本では「腹八分に医者要らず」というのに対して、「부른 배가 더 답답하다（いっぱいになった腹がもっと苦しい）」がある。

早起きの効能を説いたことわざは日本に多い。「薬飲むより朝日を浴びよ」、「朝起きの家には福来る」、「早起きは三文の得」、「早寝早起き病知らず」などがある。韓国では「일찍 일어난 새가 벌레 한 마리 더 잡아 먹는다（早く起きた鳥が虫を一匹多く捕って食べる）」という。日本でいう「早起きの鳥は虫をとらえる」とよく似ている。

人の手に注目したことわざに「어미 손이 약손이고 아비 손이 범손이다（母の手は薬の手、父の手はトラの手）」というものがある。子どもたちの痛い所を軽くさすりなでてやる大人の手を韓国語で「약손(ヤクソン)」という。薬指という意味のほかに、日本語で「痛いの、痛いの、飛んで行け」というときに用いる。「내 손은 약손이야（私の手はよく効く手だよ）」という。母親や祖母が幼い息子や孫娘に注ぐ暖かい眼差しが感じられて、心が安らぐ表現である。

以上、先人たちの健康に対する思い入れを、ことわざを通して見ることによって、他者と自らの身体と健康を厭(いと)うきっかけになれば幸いである。

【参考文献】　＊俗談＝ことわざ

李基文 편 1962/2005『개정판 속담사전（改訂版俗談辞典）』일조각（一潮閣）

박연구（朴演求）지음（著）1998/2005『속담에세이（俗談エッセー）』범우사（凡友社）

宋在璇 엮음 1998『음식속담사전（食べ物俗談辞典）』東文選

최창렬 지음 1999『우리 속담 연구（韓国俗談研究）』일지사（一志社）

時田昌瑞 2009『図説ことわざ事典』東京書籍

渡辺吉鎔＋鈴木孝夫 1981『朝鮮語のすすめ』講談社現代新書 614

渡辺吉鎔 1983『はじめての朝鮮語』講談社現代新書 687

渡辺吉鎔 1996『韓国言語風景』岩波新書 438

第３回　平成 22 年６月 26 日
タイの十二支　ー動物を通して知ることばと文化ー

国際学部言語教育研究センター 准教授　野津 幸治

日本と同様タイにも十二支があり、中国から伝わったと推定される。現存する最古の文献である 13 世紀のスコータイ第１碑文第３面に辰年、第４面に亥年、未年が記載されている。しかし、タイと日本では十二支の動物が異なっている。日本のヒツジがタイではヤギに、イノシシがブタになっている。また干支が変わる時期も、４月のタイ正月（ソンクラーン）である。ただ最近は、１月に変わると誤解している人もいるらしい。

講座では 12 種の動物について紹介したが、本稿では紙幅の都合で５種の動物のみをとりあげる。以下、動物を通してタイのことばと文化をながめてみたい。

タイ語のネズミ（ヌー）には「小さい」という意味もある。例えば「バラ･ネズミ」は「花の小さなバラ」を意味する。また人称代名詞として、大人が子ども（女性）に対して、または子ども（女性）が大人に対して用いる。大人の女性でも、自分の親ぐらいの年頃の人に対して自分のことをヌーという人がいる。慣用句に、「米びつに落ちたネズミ」（＝金持ちの娘と結婚できた男）がある。この慣用句のネズミは男性を表している。

ウシ（ウア）はタイ人にとって身近な動物である。ウシは、おもに農耕（田畑を耕す･脱穀する･糞を肥料にする）、儀礼（始耕式）、娯楽（競牛、闘牛、影絵芝居の人形）、運搬（牛車）に利用される。慣用句に「稲作期にウシを買い、冬に布を買う」（＝物を安く買うには買い時がある＝物事にはするべき適当な時がある）がある。

トラ（スア）はタイ人にとって「力」のシンボルであり、刺青の図柄にも用いられる。また牙や額の皮をお守りに利用する。一方、トラのイメージは「悪賢い」「雄雄しい」「獰猛」「危険」である。慣用句に「尻尾を引きずって歩いているトラ」（＝相手を油断させるためにわざとしょんぼりとしていて、隙をねらって不意にぱっと何らかの行動に出る人＝相手を威嚇するために杖などを持って、トラが尻尾を引きずって歩くような格好をする人）がある。

タイ人もウサギ（クラターイ、カターイ）が月にいるように見えるそうである。タイ料理やお菓子作りに欠かせない食材の一つにヤシの実の殻に付いている白い果肉（カティ）がある。カティを削り取る道具の名称は、その形状から「ヤシを削るウサギ」という。男性が小便をすることを俗語で「ウサギを撃つ」ともいう。慣用句に「ウサギが月を手に入れたいと望む」（＝下賤な男が高貴な女性（高嶺の花）を妻にしたいと願う＝分不相応な願望を抱く）がある。

十二支の動物の中で唯一実在しない竜（ナーク）は、インド神話で大きなヘビの姿をした神で、水中または地下に住み、雨を降らす力があると信じられ、人間の姿に変身することもできる。造形物は王宮や寺院の屋根の竜形の装飾、寺院の階段の手すりの装飾などにみられる。タイでは剃髪して僧籍に入ろうとする人をナークと称する。

十二支の動物を通してタイのことばと文化を紹介した。しかし、これらをタイ人あるいはタイ族固有の文化として一括して考えることは出来ない。慣用句も異文化の影響を受けやすい。今日観察できるタイの生活文化を表面や一部分だけでなく深層部分まで丁寧に検討し、理解を深める必要がある。

第４回　平成 22 年7月３日
日本にいる二人の幸せな外国人　ーさまざまな文化を越えて一つの文化へー

国際学部言語教育研究センター 教授　B.U. カルステン

私はベルント・ウーヴェ・カルステンです。ウーヴェというのは「鎧が光る」という意味を持っています。皆からカルステン先生と呼ばれるよりも、「ウーヴェ！」と言ってもらう方が親しみが感じられるので、そうしてもらっています。皆さんも気軽にそう呼んでください。

さて、私は 60 年代にはヒッピー生活も体験しました。学生時代は比較芸術や心理学などを学び、兵役の義務を受けず、３年間の社会奉仕で病院などでいろいろなことを経験し、人間性を培いました。そうこうするうちに、東洋にさらに強い憧れを持ちだし、特に日本に興味を持ったのは、ノーベル文学賞受賞者、川端康成の『雪国』を読んでからです。

日本の風景や日本文化に興味を持ち、ぜひ日本に行き、日本の人と交流し、日本の日常生活を肌で感じたいと思ったのです。日本でもドイツ語に興味を持っている人が、学生以外にもいることを知り、日本でのドイツ語講習機関でもある「ゲーテ協会」の専任講師として働き、日本人女性と知り合い、結婚し、日本の古都である京都の花園に住んでいます。子供が２人おりますが、すでに成人しています。「ゲーテ協会」を退職し、この天理大学に奉職して 20 年以上が経ちました。

日本に来て、道が分からなくなって、偶然会った若い人に、日本語で道を尋ねているのに「英語わかりません」と去っていかれたり、ちょっと喋り出しただけなのに、逃げていかれたりしたことは、今ではいい思い出です。隣組の行事にも積極的に参加したり、近所の子供に英語を教えたりして、楽しく暮らしています。天理大学でも授業のほか、学科主任も務めました。留学生やドイツ語を学ぶ学生以外にも声をかけ、人の輪を広げております。

皆さんも人生を大切にし、大いに楽しんでください。

国際学部言語教育研究センター 教授　O. ジャメ

食べ物と料理、言語

いわゆるフランス料理を一言で語ることはできません。ノルマンディー、ブルゴーニュ、リヨン、プロヴァンス、南西部など地方によってさまざまな郷土料理があるからです。パリで唯一、本当のパリ料理といえる一皿、それはステーキのフライドポテト添えです。食材も地方の気候、文化に深く関係しています。フランス西部のバター、北部のクリーム、地中海沿岸のオリーブオイル、ニンニク、そしてもちろん自然の恵みともいえるワインなどが有名です。

いつも私が感じている、フランスのとても特徴的なことといえば、フランスの北部と南部を分けている気候、言語、文化の境界間の結びつきです。北部ではミモザやオリーブ、イチジク、アーモンド、ナスなどがないためピーナッツオイルを使用し、ニンニクは好みません。中世のころは、この地方では現代フランス語につながるオイル語が話されていました。

南部ではミモザやアーモンドが花咲き、オリーブ、ナス、メロン、スイカが実ります。ニンニクのほかタイム、バジリコ、ローリエなどのプロヴァンス産のハーブも好んで食べられます。そして、今も少数の人々に使用されているオック語やプロヴァンス語は、ラテン語に近い、中世のオック語が起源です。その名残がボルドー、トゥールーズ、アヴィニョン、マルセイユの住民のアクセントに残されています。

フランスのさまざまな人々が集う場所

家庭や会社、とくにカフェやレストランなどさまざまな場所で、フランス人は政治をはじめ、人生の重要なテーマについて話すことが大好きです。とくにカフェでは、ホールやテラスに比べて飲み物の値段が半額になる、伝統的な錫のカウンターに立って熱く議論することが好きです。政府のことや定年、税金、失業政策、神様のことまでも、そして、時期が近かろうが遠かろうがバカンスについてなど、さまざまなことを語り合います。

家族や家や仕事に関して

価値に関して、最重要とされるのはいつも家族です。ヨーロッパでは異例の２ポイント高いフランスの出生率がその理由の一つです。フランスの人口が規則的に増加するこの高い出生率は、子供を希望する女性やカップルなど、さまざまな形態に対して公的援助がなされるからです。また婚外子は決して珍しいことではありません。この家族重視の価値観は、フランス人の家、インテリア、庭に関する好みによっても説明されます。日曜大工、庭仕事はフランスではつねに人気の高い活動です。

基本的な価値として、次にくるのはもちろん仕事です。仕事に関して、フランス人の労働時間は、アジアの国々にくらべて少し短いです。しかし、驚いたことに、統計によれば、フランスは労働生産性がヨーロッパの中でいちばん高いのです。ドイツやはるかこの日本よりも。

日本についての思い、日本が好きな理由

多くのさまざまな理由で、ここ日本で生きる喜びを感じています。まず、フランスと日本とは共通性があるということです。続いて、日本の生活様式、日本の自然に魅せられています。特に食品、日本家屋、お風呂、温泉などに魅力を感じます。また、フランスではできない活動やクラブ、会社の設立などの可能性もあります。

最後に、私をむかえてくれた日本、住民の方々、素晴らしい友達、そしてもちろんこの素敵なひとときを与えてくれた天理大学、思いやりのあるすべての同僚に感謝いたします。

第 5 回　平成 22 年 7 月 10 日
言葉の翻訳、思想の伝達　ーきりしたん教理書から BUSHIDO までー

国際学部外国語学科 教授　東馬場 郁生

きりしたん教理書『どちりいな・きりしたん』と、新渡戸稲造の英文『BUSHIDO』を例に、文化や思想が言語の違いを越えてどのように伝えられるのか考えてみたい。

16 世紀中ごろ、西洋と日本の接触が始まった。それは西洋からの進出によるもので、貿易とキリスト教宣教とが組み合わされたものである。キリスト教宣教師は日本をどのように見たのか。イエズス会巡察師ヴァリニャーノは、徳操と学問に必要な能力について、日本人以上に能力ある人々を知らないと述べた。同時に、別の宣教師フロイスは約 600 のヨーロッパとの違いを挙げている。彼らはヨーロッパとは異なる日本を強く意識し、自らの価値観を伝えようとした。

やがて適応主義とともに日本語が本格的に学習されるようになり、教理書や辞書が出版された。ここでは『どちりいな･きりしたん』(1591)に着目しよう。それは､M. ジョルジェによる問答体カテキズム『Doctrina Christã』(1566, リスボン）の翻訳版である。

翻訳は解釈と説明の作業であるが、『どちりいな』では、創造主デウス、イエスによる贖罪、秘跡を含む多くの項目に大きな追加、修正が施されている。これは、原版の輸入から翻訳出版まで、約 20 年間に生じた教理伝達上の問題や困難を反映している。日本人に理解しやすいように、日本の環境に適応した内容になった。

『どちりいな』には、でうす、くるす、おらしよ、さからめんた等 100 以上の不翻訳語がある。意味の変容を懸念して採られた原語主義であった。しかし、信徒に「きりしたん専門語」がすべて容易に理解できたのではないだろう。その場合､当時､日本語の宗教語彙の大半を占めた仏教語が用いられ説明された。『どちりいな』には功徳､善根､解脱､回向、談義、後生、安心決定など仏教語が多く見られる。

ヨーロッパ人宣教師は、日本の言語と文化の特殊性を強く認識しつつも、それらを媒介に彼らの思想を伝えようと試みた。それは自らが持つと信じる精神文化の普遍性を、日本という特殊のなかに広める努力でもあった。

つぎに新渡戸稲造の場合を見てみよう。彼は、英文『BUSHIDO』(『武士道』)（1900）の著者として有名だが、国連事務次長（1919 － 1926）を勤めた国際人であり、教育者、農学者としても活躍した。新渡戸は学生時代､「太平洋の橋」となることを目指していたという。彼は｢英語名人世代｣と称されるほど英語を習得していたが､『BUSHIDO』の驚くほど流麗な英語は日本での教育において相当部分が培われていたようだ。（大田雄三『< 太平洋の橋 > としての新渡戸稲造』）

日本を語るために新渡戸が英語力とともに備えていたのは、西洋文化の知識と日本と西洋との比較の技である。『BUSHIDO』では、義、勇、人、礼、誠、名誉、忠義などの項目がヨーロッパの歴史や文学からの類例とともに示されている。武士道に対する西洋人読者の理解を助けるためであった。新渡戸は、西洋との比較が、西洋の読者に対して武士道を語る唯一の方法だとさえ考えていたようだ。彼は、比較対照を西洋文化に見いだせないという理由で「孝」の追加を断念している。そして、『BUSHIDO』の後半では、武士道がキリスト教の優越性とともに意味づけられる。これは新渡戸がキリスト者（クエーカー派）であったことと関係がある。武士道を包含する普遍的真理としてキリスト教が存在するとの主張がなされる。

西洋の読者は比較される西洋の道徳観、美意識を背景に理解したであろう。新渡戸が伝えたのは西洋風武士道、キリスト教的武士道であったのか。もしそうならば、彼の伝達は 16 世紀に日本にきた西洋人とは逆の方向性をもつ。16 世紀の宣教師は、自ら信じる「普遍的価値」を「日本」という特殊性の認識の中で主張した。一方、新渡戸は、日本の特殊性を自ら信じる普遍性の中に溶け込ませながら伝えたのである。

言葉を媒介に実現する思想の伝達は、伝える側と受け取る側の言語的条件と、伝達者による特殊と普遍の主体的認識を背景にしている。とくに後者において、その方向は異なるが、今回見た二つの事例は見事に一致しているといえよう。

第１回　平成 22 年 10 月 16 日
赤人の行幸讃歌

文学部国文学国語学科 教授　川島 二郎

山部赤人は、奈良時代を代表する宮廷歌人であり、『古今和歌集』の序文においては、人麻呂とともに、『萬葉集』の時代を代表する歌人として称揚されている。

宮廷歌人の系譜としては、皇極朝から天智朝を中心に活躍した額田王、そして、天武・持統朝を歌いあげた歌聖柿本人麻呂が存在し、奈良時代の歌人たちは、とくに人麻呂の作品を規範として尊ぶところが大きい。赤人の吉野行幸讃歌を読解する際にも、まずは人麻呂の吉野行幸讃歌（巻１、36 ～ 9）の影響と、そのうえに成されている赤人の独創を考えてゆかなければならない。

ここで見る赤人の吉野行幸讃歌は、長歌と反歌二首からなる第一歌群（巻６、923 ～ 5）と長歌と反歌一首からなる第二歌群（926 ～ 7）とを合わせて言う。これらは、神亀元年（724 年）三月の聖武天皇の行幸の折に、連作として詠まれたと考えられる。聖武は、直前の二月に即位しており、白鳳期の英主天武天皇の再来（天武の曾孫に当たる）として、天武と持統（菟野皇后）が決起し壬申の乱を勝利した聖地吉野を訪れたのである。

赤人は人麻呂を継ぐ宮廷歌人として、天武・持統朝の人麻呂にならい、聖武の吉野行幸を寿いだ。ただし、清水克彦「赤人の吉野讃歌」が分析したように、人麻呂の歌句の利用は、第一歌群に多く見られるが、第二歌群にはそれがほとんど見られない。であるならば、赤人の意匠は、とりわけ第二歌群において探られてしかるべきであろう。はたして、そこには、人麻呂の吉野讃歌には詠まれない、聖武の宮廷人を従えた王者としての狩猟が謳われているのである。

そして、注目すべきは、「朝狩」、「夕狩」、「馬並めてみ狩ぞ立たす　春の茂野に」の歌句である。これらは、舒明天皇の狩猟の際に中皇命（なかつすめらみこと）が天皇に献じた歌（巻１、３～４）を踏まえていると、考えられる（坂本信幸「山部赤人の方法」）。長歌には「朝狩に今立たすらし　夕狩に今立たすらし」、反歌には「馬並めて朝踏ますらむ　その草深野」とあるとおりである。赤人は、白鳳の盛期を謳った人麻呂の作品を踏まえるのは当然として、天武の父であり持統の祖父にあたる舒明の狩猟の際の寿ぎの歌にも注目し、自らの讃歌に厚みを与え、手厚く聖武の行幸を寿いだのである。

さらに、舒明御製の国見歌にも注目したい。そこでは、大和の「国原」と「海原」の豊かさを歌う素材として、それぞれ「煙（けぶり）」と「鷗（かまめ）」とが選ばれている。一方、赤人の第一歌群においても、反歌二首のそれぞれに、「ここだもさわく　鳥の声かも」「清き河原に　千鳥しば鳴く」と、吉野の地の豊かさを歌う素材として鳥が選ばれている。素材としての鳥は、人麻呂の吉野讃歌においては選ばれていない。赤人は、第一歌群でもとくに長歌において人麻呂の歌句を踏まえ、そのうえで、反歌二首においては、吉野を寿ぐ新たな素材として、舒明の国見歌に詠まれた鳥を選んだと考えるべきであろう。

それでは、なぜ赤人は舒明朝の作品を踏まえたのであろうか。その理由は、まずは、『古事記』の構成を見れば、諒解できるはずである。『古事記』上中下巻には、その書名のとおり、いにしえの事柄が神話時代に始まり 33 代推古天皇までにわたって記されている。それは、逆に、『古事記』編纂当時（和銅五年、712 年）、34 代天皇からは近代・現代、つまり我らが時代であると認識されていたことを示している。その 34 代天皇こそは、舒明であり、我らが時代の始祖として赤人も認識していたはずである。

さらに、その点に関して述べるならば、養老元年（717 年）頃に、元明天皇の発意のもとに『萬葉集』の巻一・二が舒明皇統歌集として編まれている（伊藤博『萬葉集の構造と成立』上下）ということも、見落としてはならないであろう。赤人は、神亀元年から天平八年（736 年）にかけて作品を残している。白鳳の盛期の天武・持統朝のその先に、我らが時代の始祖としての舒明を認識している時代の空気の中に、生きていたはずである。

宮廷歌人赤人は、白鳳の盛期とともに自分たちの時代の始祖である舒明朝を彷彿とさせる行幸讃歌によって、深切に手厚く、吉野行幸ひいては聖武朝を寿いだのである。

第２回　平成 22 年 10 月 30 日
則天文字は日本に伝わったか

文学部歴史文化学科 教授　山本 忠尚

「則天文字」とは、唐代の女帝、というより中国史上唯一の女帝であった武則天が新造し、強制的に使わせた文字である。中国では「武周新字」あるいは「武則改制新字」などと呼ぶ。則天文字には多くの問題点がある。以下、順次説明する。

１．いつ制定されたのか

太后が新字を制定したのは載初元年（689）正月一日、鳳閣侍郎の宗秦客（そうしんかく）の手によって献上され、天下に実施された。平岡武夫『唐代の暦』にしたがうと、西暦 689 年 12 月 18 日である。

２．どのような文字が新造されたか

則天文字は、載初元年の制定時にすべてそろっていたのではなく、『新唐書』巻七十六「則天順聖皇后伝」には「照、天、地、日、月、星、君、臣、人、載、初、年」の 12 字を列挙してあり、当初は 12 字のみだったようだ。年号に用いる「授」「證」「聖」は、それぞれ天授元年（690）、證聖元年（695）に追加された、と考えられている。「照」は武則天専用であった。計 17 文字があったことになり、さらに日・月にはそれぞれ２種がある。

３．文字を新造するにあたって、なにか原則があったのだろうか〔図参照〕

（１）象形：星…星を象形化、月…○の中に左旋マンジ（卍）

（２）会意（合字）：曌（照）…明＋空あるいは日＋月＋空、埊（地）…山＋水＋土、
君…天の省画＋大＋吉、臣…一＋忠、載…土＋几＋車＋灬、初…天の省画＋明＋人＋土、
年…千＋万＋万＋千、授…禾＋久＋几＋王、證…永＋主＋久＋王、聖…長＋正＋王、
圀（國）…口＋八＋方、人…一＋生

（３）象形＋会意：□（月）…匚の中に出

（４）古文復活：□（天）…「天」の篆書体の古体、□（日）…○の中に乙ないし～、
～は日輪の象徴である三足烏の象形、□（正）…「王」の古文を復活

４．則天文字の使われ方

墓誌　墓主人の来歴や生前の官位・業績を記したのが「誌」、そのうしろに詩を加えるばあいがある。それが「銘」。則天文字を使用した墓誌は500余方ほどが知られる。そのうち、論拠となる約１割の資料を抽出し、表にしてみた。

売地券　死後の安住の地を買った証文。紙や磚などにその旨を記し、墓内へ納めた。

石碑　石碑については、『金石萃編』、『金石続編』、『八瓊室金石補正』、『山右石刻叢編』、『山左金石志』および『支那美術史彫塑篇』などの集成があり、その中に収められた「昇仙太子碑」、「王仁求碑」、「契苾明碑」、「封祀壇碑」および「孝明皇后碑」などに則天文字が認められる。

造像記　造仏のいわれを、碑、仏像台座、光背などに記した。

舎利石函　地宮に納める舎利容器の外護用の石函。蓋や側面に施入者のリストなどを刻した。

武則天除罪簡　1982年、河南省登封市嵩山峻極峰の北側の岩の下で発見。長さ36.3cm、幅7.8cm、厚さ1mmほど、重さ223.5gの金板。３行にわたって、63の文字を刻む。それぞれの文字の筆画の周囲を鑿打ちによって表したもの。「曌」字の唯一の実例。

文書　新疆ウィグル自治区吐魯番のアスターナ墓地出土品など。

５．どこまで広がったか

北は山西省汾陽、南は雲南昆陽、広東羅定、広西龍州、江蘇鎮江などで発見されている。西は寧夏固原、甘粛武威、さらには新疆ウィグル自治区吐魯番のアスターナ墓地まで。

問題は東で、河南洛陽より東の例は知られていない。朝鮮・日本にはあり。

６．則天文字の終末

神龍元年（705）十一月二十六日、武則天はその波乱に富んだ生涯の幕を閉じた。夫のねむる乾陵に合葬されたのは翌二年五月である。その前、神龍元年正月二十五日には中宗が復位し、ついで国号を周から唐に復した。武がおこなった治世をすべて否定しようとしたのである。この際に則天文字も廃されたと考えられてきた。

７．則天文字は日本でも用いられたか

（ｉ）伝世資料

養老『律』（名例律、八虐条）

『王勃詩序』（正倉院）

『大方廣佛花嚴經』（石山寺本、熊野神宮寺本）

字典『新撰字鏡』、『類聚名義抄』（観智院本）

碑文『益田池碑銘』

佐波理皿（正倉院）

（ⅱ）出土資料

墓誌「下道朝臣圀勝圀依母夫人」骨蔵器（岡山県矢掛町）

墨書土器

むすび

則天文字と意識して使用したかについては疑問がある。ただ単に忠実に写書したか、あるいはマジカルな力を感じて、一部の文字を一字だけ用いたのであろう。そのうち圀だけが現在まで生き残った。

【参考文献】（日本語読み、五十音順）
何漢南「武則天改制新字考」『文博』、1987 年第 4 期
蔵中進『則天文字の研究』翰林書房、1995
施安昌「関于武則天造字的誤識與結構」『故宮博物院院刊』、1981 年第 4 期
田熊清彦「則天文字」『神仏と文字　文字と古代日本 4』吉川弘文館、2005
東京国立博物館他編『宮廷の栄華　則天武后とその時代展』NHK・NHK プロモーション、1998
東野治之『書の古代史』岩波書店、1994
常磐大定「武周新字の一研究」『東方學報・東京』第 6 冊、1936
外山軍治『則天武后　女性と権力』中公新書 99、1966
平岡武夫『唐代の暦』唐代研究のしおり第一　京都大学人文科学研究所索引編集委員会、1954
平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館、2000
藤枝晃『文字の文化史』同時代ライブラリー 83　岩波書店、1991
李弘稙「慶州仏国寺釈迦塔発見の無垢浄光大陀羅尼経」『朝鮮学報』第 49 輯、1968

なお、本講演の後、論文「則天文字の新研究」を掲載した『天理参考館報』第 23 号（天理大学出版部　2010 年 10 月）が刊行された。講演の内容を詳しく知りたい方はこれをお読みいただきたい。

第３回　平成 22 年 11 月 13 日
平城京で暮らしていた人々

文学部歴史文化学科 非常勤講師　岩宮 隆司

平城京で小規模な宅地（１/16 町もしくは１/32 町）が発掘されている所は、1998 年の時点で、５ヵ所である（1）。この内、３ヵ所は、奈良時代の後半に、東市（左京８条３坊の５・６・11・12 坪）と西市（右京８条２坊の５・６・11・12 坪）の周辺部にあった（2）。そして、平城京で暮らしていた所が判明する人は、1998 年の時点で、116 人である（3）。この人達の分布状況より、５条大路より南側には、６位以下の下級役人が多く居住していたこと、その中でも、特に東市の周辺には、奈良時代の後半に、東大寺の写経生が多く居住していたことが判明する。

一方、東大寺の正倉院文書の中には、写経生が写経所へ銭の借用を申請している文書（月借銭解）や、写経所が写経生へ行った借銭を記した文書が、106 点ある。この内、44 点は、担保を設定し、銭を借用している。担保は、布施（写経所で勤務した給料）として支給される予定の「布」を設定している 25 点と、「布以外の物」を設定している 19 点に、大別される。そして、布以外の物は、「家屋」の 16 点（その内、１点は口分田に変更）、「家屋以外の物」の３点（「婢阿古女」「大刀身　三隻」「国養〔物ヵ〕」）に、細別される。また、担保とされている家屋のある場所は、「東市周辺」（８条２～４坊と９条３坊）の６点、「東市以外の京内」の２点、「京外」の３点（「久津ヵ」「佐村」「添上郡山公郷」）、「不明」の５点となっている。

造東大寺司は、天平勝宝７・８歳（755・6）に、東市の西辺にあった相模国の調邸（１町）を購入している（『大日本古文書』④ 58・83・109・114 頁）。当時、市の周辺地は、積極的な経済活動を行う大寺や有力者にとって、必要不可欠な場所であった。また、天平宝字６年（762）３月には、借銭を返済せず、石山寺の造営現場で働く写経生の史料（『類聚三代格』）や、天平勝宝３年（751）には、銭出挙の担保となっていた宅地を取り上げられ、離散した百姓の史料がある（『大日本古文書』⑮ 441 頁）。当時、家屋を担保としていた写経生が、借銭を返済できず、家屋などを取り上げられても、不思議ではない社会状況であった。

上記の家屋を担保とする 16 点の内、借銭の返済記録があるものは、12 点ある。この内、返済予定日頃に返金しているものは６点（4）、返済予定日に近い布施の支給月（４・７・９・11 月）頃に返金しているものは４点（5）、返済予定日より（３ヵ月から 10 ヵ月ほど）遅れているものは２点である（6）。この２点は、何れも、宝亀３年（772）の前半に集中していると共に、超過した日数分の利息を払っているだけであり、担保となっていた家屋も差し押さえられていない。この程度の延滞では、写経所が担保の家屋を取り上げることはなかった様である。

以上より、奈良時代の後半における市（特に東市）の周辺には、諸国や寺院の出先機関となる調邸や市荘だけでなく、小規模な宅地が広がり、その様な宅地に多くの写経生が住み、家屋を担保に借銭している写経生も多かったことが分かる。この様な状況（特に、東市周辺に家屋担保の写経生が集中していること）が、京内における経済活動の中心地である東市の歴史地理的な条件により、創出されたものなのか、身分的な序列も反映している京内の居住地の中で、単に京域の東南隅に最末端の下級役人が多かったことにより、創出されたものなのか、不明である。しかし、今後、両者の可能性や家屋を担保にしている意味を考慮しながら、史料を検討していけば、東市の周辺や写経生の借銭に関する実態が、より鮮明になってくるであろう。

(1)『古代都市の構造と展開』（奈良国立文化財研究所、1998 年、212 頁）。
(2) 各種の解説書で、イラストや模型で復原されている下級役人の宅地は、主にこの３ヵ所である。西市の場所は、３坊だと丘陵にかかり、２坊だと秋篠川の水運を利用できることから、決められたと推定されている。
(3)『なら平城京展’98』（奈良国立文化財研究所、1998 年、46 頁）。
(4)『大日本古文書』⑥ 390・515・567 頁、⑲ 297・305・305・316 頁。
(5)『同上』⑥ 425・426・509 頁、⑲ 300 頁。
(6)『同上』⑲ 312・315 頁。

第４回　平成 22 年 11 月 27 日
「なら」の文学を意識した次代の者たち

文学部国文学国語学科 教授　仁尾 雅信

古代物語が誕生する背景には、発案者・制作者・評価者の三つの立場の人間がいたであろう。身分の高い者が物語を作ろうと思い立ち、ある者に命ずる（依頼する）、ある者はその命令者やそして周りの評価を気にしながら制作する、そういう構図である。そこで生まれた物語は次の時代の者に新たな刺戟を与えずにおかない。こうして物語は進化発展していくのであろう。奈良時代に作られた『古事記』は、正式には物語として認知されていないかも知れないが、平安時代の物語作者達はそこから様々な制作方法を学び取っている。物語文化の伝統である。今回の発表はそうした物語制作方法の継承・伝統について考えてみた。

『古事記』は上巻に、火の神を産み他界した伊耶那美命を夫であった伊耶那岐命が「黄泉国に追（お）ひ往（ゆ）」く話が語られる。このままでいけば夫婦愛の深さを描いた美談で終わるのだが、話はそう簡単にハッピーエンドにはならない。死者の食べ物を食べてしまった伊耶那美命が、復命のため相談に行くからその間「我（あ）を莫視（なみ）ましソ」と、伊耶那岐命に懇願する。しかし、伊耶那岐命はその約束を破って垣間見てしまう。夫婦間の約束事を、好奇心とスリルを押さえきれずに破り、夫婦の復縁が断絶してしまう。このような忌避を犯す、夫婦の違約の話が、上巻にはもう一つ記されている。豊玉姫と火遠理命（山幸彦）の話である。これも、豊玉姫が出産に際し「妾（あ）を見勿（みじ）」といったのに山幸命は垣間見て約束を反故にしてしまい、離別の結果を迎える。

垣間見を物語を制作するにあたり恋の場面、特に恋愛の初期段階の行為として、平安時代の物語制作者達は、考案した。『古事記』では見られる対象は非常におぞましいものであるが、「物語の出来（いでき）始めの祖」（『源氏物語』「絵合」巻）といわれる『竹取物語』では、かぐや姫を世の男性達が垣間見るようになる。かぐや姫も月の世界の者であるから非人間という点では『古事記』につながる。美しい人間を垣間見る話となると、『伊勢物語』の初段があり、また、『源氏物語』では紫の上を光源氏が見出す場面、宇治の女君達の素顔を薫が始めてのぞく場面に使われ、物語の展開上大きな役割を果たしている。

違約という行為は、中巻でもあらわれる。先述の上巻では夫婦の関係であったが、中巻では三者の関係になり複雑さをます。しかも、二者択一の選択を余儀なくされ、その結果相手を裏切り愛の証を反故にしてしまう。垂仁天皇の后佐保姫には兄に佐保彦がいる。佐保彦は佐保姫に「夫ト兄与孰れ愛しき歟」といって天皇の殺害をそそのかすのである。佐保姫は最終的には兄の元に走り死を選ぶのであるが、そこには二人の男性の間で苦渋の選択を迫られ、結果的に一方を裏切る愛の姿がある。

『源氏物語』は三角関係を構想の軸に据えているといっても過言ではない。光源氏と桐壺院･藤壺、光源氏と女三宮･柏木、光源氏と紫の上・女三宮、これらの三角関係の有り様が第一部、第二部のテーマであり、浮舟と薫・匂宮の関係が第三部のテーマだといえよう。渦中の人物は相手を選択できず、出家もしくは死への道を歩むといった男女の愛が描かれている。『古事記』の佐保姫の生き様に重なるものがある。

平安時代の物語の作者達は、物語を創作するテクニックをこのように『古事記』に求めていたふしがうかがわれる。逆にいうと、『古事記』には、歴史を記すという一面とともに物語的にも書かれたという一面があるのではないだろうか。

第５回　平成 22 年 12 月４日
都にやってきたアザラシたち　ー古代日本の海獣皮の利用ー

国際学部地域文化学科 教授　藤田 明良

１．正倉院のアザラシ皮製馬具

正倉院宝物に奈良時代の馬具十数点があるが、そのなかにアザラシ皮でつくられた鞦（したぐら）がある。2002 年から 2004 年に実施された調査の結果、二点の鞦の切付（きつつけ）にアザラシの毛皮が使用されていることが確認された。鞦は鞍橋（くらほね）の下の敷物で、「下鞍」とも書く。二枚重ねの場合は表側を切付と言い、人目につく装飾的な部位である。アザラシは北海道以北に生息する北の海獣である。その毛皮製品がなぜ、どのようにして奈良の都にもたらされたのか。古代の都人たちは、毛皮にどんな意味を込めて利用していたのだろうか。

２．古代文化における毛皮の位相

動物の皮には皮革と毛皮の二種がある。古代日本では毛皮は馬具や太刀等の装飾に用いられた。列島産の鹿・猪・熊皮の他、大陸産の虎や豹の毛皮も利用された。古代の人々が毛皮に求めたものは、装飾性と、素材となる動物のパワーによって身を守るという神秘的呪術的指向であり、目立つ文様を持ち、異形異能のモノが棲むと観念されていた海外異域から来るものに、高い付加価値があった。平安前期の『延喜式』には、虎や羆は五位以上の貴族、豹は三位以上と参議の公卿、という官位に応じた使用ルールがあった。奈良時代初期から既に、六位以下の官人が、虎・豹・羆皮を鞍具に用いることを禁じた規制があった。

３ 古代史料の水豹と使用例

奈良時代の史料に、今のところアザラシは見出せない。平安前期の辞書『倭名類聚抄』には「水豹　文選…　和名阿左良之」と中国の『文選』に登場する水豹を日本のアザラシと同じものとしている。同時期の『新儀式』には、天皇の野行幸に同行する鷹飼の装束に水豹皮の使用が見える。 水豹皮の使用例として最もよく登場するのは、尻鞘という太刀のカバーである。平安前期の有職故実書『西宮記』に、尻鞘も公卿は豹皮、四位五位は虎皮で、水豹皮を用いるのは六位の官人である、とある。鎌倉時代初期の春日祭でも、六位の舞人が水豹の尻鞘を用いており、奈良でも水豹皮が見られたことがわかる。正倉院宝物のような鞦の切付への使用例は、平安末期の 1176 年の賀茂祭の中宮使六位蔵人の水豹切付が初見である。

４．古代史料に見える葦鹿

平安後期までの史料には、水豹の鞦（切付）は登場せず、『西宮記』は下鞍（鞦）について豹は公卿、虎は四位五位　葦鹿は六位と、六位のは葦鹿皮としている。1141 年の大嘗会の御禊でも、五位は虎皮切付、六位は葦鹿切付である。葦鹿皮の初見は平安初期の 807 年に葦鹿皮の使用が贅沢として禁止されたことで、当時、羆皮等と共に装飾用に都で使われていたことがわかる。『倭名類聚抄』には「葦鹿　和名阿之加」とありアシカと発音していた。『延喜式』では陸奥国と出羽国が税米で購入し都に進上すべき物に葦鹿皮が登場する。平安後期の和歌には「わが恋は　あしかをねらふ　えぞ舟の　よりみよらずみ　波間をぞまつ」とあり、葦鹿は蝦夷の海の生物という認識が都の貴族たちにあったことがわかる。

5.「葦鹿」「水豹」の正体は？

この葦鹿を、江戸時代まで日本各地にいたニホンアシカと同じ動物と考えるわけにはいかない。後者は江戸時代まではミチやトドとも呼ばれており、アシカの名に統一されたのは、明治時代のことである。また、ニホンアシカは毛皮としては価値がなく、皮革としても牛馬の代用品として使用された程度で、葦鹿皮はこれとは異なる海獣の毛皮と考えるべきである。葦鹿の正体に迫るヒントは古代における馬の毛並みをあらわす葦毛（灰白色の毛に黒色・濃褐色等の差し毛のあるもの）と鹿毛（シカのように茶褐色）という語である。葦鹿は葦毛と鹿毛をミックスしたような毛並みの毛皮をいったのではないだろうか。そのような毛並みの水棲動物は、日本周辺ではアザラシ以外にはいない。葦鹿皮も水豹皮とは異なる毛並みのアザラシの毛皮ではなかっただろうか。

絵画資料を調べると、桃山時代の『調馬図』（醍醐寺蔵）に描かれた十数匹の中に、暗い青灰色に斑点を持つ毛皮の障泥を付けた馬がいる。この毛皮はゴマフアザラシの背面ではないだろうか。また、鎌倉時代に描かれた『平治物語絵巻』の六波羅行幸の場面に、茶褐色に白輪紋の毛皮の下鞍を付けた馬がいる。このような毛皮を持つのは、日本周辺ではゼニガタアザラシかワモンアザラシだけである。

6．北のシール・ロード

葦鹿皮と同じように水豹皮も東北地方から都にもたらされた。1081 年に陸奥守となった源義家に対し清原真衡が送った引出物や、1153 年の京都の藤原頼長と平泉の藤原基衡との年貢交渉、この基衡が毛越寺仏像を製作した運慶に与えた功物に「あさらし」や「水豹皮」が登場する。清原氏や奥州藤原氏は、北海道産の大鷲の羽やアザラシの毛皮の中継交易も掌握しており、北方史研究者は、この交易ルートをシルクロードに倣って「シール・ロード」と呼んでいる。1191 年、奥州藤原氏を滅ぼした後に都に入京した源頼朝の乗馬には「水豹毛」の泥障が懸けられていた。当時の位階は従二位で豹皮を付ける資格があったのに、頼朝が一世一代の晴舞台に水豹を選んだのは、シール・ロードの掌握を貴族たちに誇示するためだったと考えられる。

7．むすびにかえて

シール・ロードの主流は日本海側にあったといわれている。平城遷都後の 712 年、日本海側に出羽国が設置されるが、720 年には蝦夷の蜂起が起きた。しかし、聖武天皇即位の 724 年に陸奥に赴任した大野東人が、733 年には庄内にあった出羽柵を秋田付近に移し、737 年には陸奥の多賀城から出羽柵への直通路を開拓する。アザラシ皮の馬具が宝物として正倉院に納められたのは、このような聖武天皇治下の東北経略の進展と無関係ではないであろう。

平成 22 年 7 月 27 日
算数・数学であそぼう！

人間学部総合教育研究センター 教授　上田 喜彦

１．はじめに

本講座は、平成 23 年度から小学校で実施される新しい学習指導要領における算数・数学科で強調されている算数的活動・数学的活動に焦点をあて、その趣旨を理解して授業に活かしていくことをめざしておよそ次のように内容を構成した。

（１）学習指導要領改訂の趣旨と算数的活動の意義の解説。
（２）教員の算数・数学体験
【取り扱ったトピック】
①　トマト数　　②　くつばこの問題　　③　フィボナッチ数
④　面積が増える？　⑤　デルタ多面体とオイラーの多面体定理（教具の紹介）

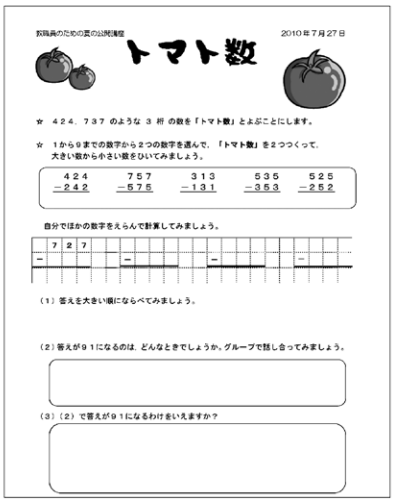
２．学習指導要領改訂の趣旨と算数的活動について

まず、算数科・数学科の学校教育法における根拠を旧法と改正法で比較し、今後の算数・数学科教育の基底について確認するとともに、学校教育法第 30 条の２項に規定された学力の重要な要素が、「① 基礎的・基本的な知識・技能の習得　② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等　③ 学習意欲」であることとその背景について講義した。次に、算数の目標分析及び算数的活動の趣旨について講義をおこなった。特に算数的活動が「児童が目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動」を意味していることを強調するとともに、目的意識をもって、主体的に取り組むためには、授業で取り扱う課題の工夫や授業構成の工夫、教師の適切な働きかけが必要であることについて述べ、算数的な活動の意義について小学校学習指導要解説に基づき講義した。その上で、いくつかのトピックを紹介し、実際に算数的活動をおこなってもらい、算数的活動の意義について理解を深めるよう努めた。

３．算数的活動に使える教材「トマト数」

講座では、いくつかのトッピクについて取り扱ったが、ここでは、「トマト数」についてのみ述べることにしたい。

右のような教材を用いた算数的活動を実際におこなってもらい、この教材のよさとして、例えば、①法則性を見いだし、子どもの問いを引き出せる②その問いについて考察することをとおして、「10 進位取り記数法」の仕組みについての理解を深められる③答えが 91 になる場合について、その理由を説明することをとおして、自分の考えを説明する力をつけることができることなどがあることや授業構成のヒントがあることを解説した。


教職員のための夏の公開講座　2010年7月27日

トマト数

☆　４２４，７３７ のような ３ 桁 の数を「トマト数」とよぶことにします。

☆　１から９までの数字から２つの数字を選んで，「トマト数」を２つつくって，大きい数から小さい数をひいてみましょう。

４２４	７５７	３１３	５３５	５２５
－２４２	－５７５	－１３１	－３５３	－２５２

自分でほかの数字をえらんで計算してみましょう。

７２７

（１）答えを大きい順にならべてみましょう。

（２）答えが９１になるのは，どんなときでしょうか。グループで話し合ってみましょう。

（３）（２）で答えが９１になるわけをいえますか？

【参考・引用】熊本大学　山本信也氏の Web ページ
URL:http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~shinya/

平成 22 年 8 月 2 日
これからのヘルスプランニング

体育学部体育学科 准教授　村上 佳司

日本の健康・体力に関わる諸問題は、簡単には解決できない。

日本の現実として、まずは、「遊びを忘れた子どもたちの危機」が挙げられる。アレルギー・鼻血・貧血・過呼吸を起こす子どもが増え、生活は、管理されたスポーツを行うか、家にいて TV（ゲーム）･勉強をするかの二極化になっている。更に「塾」が大きく子どもたちの生活にのしかかり、戸外で遊ぶ子どもが減ってきた。

続く世代の特徴は「落ち込む青年の気力と体力」である。明治以降、体位は向上したが、筋力、持久力、柔軟性が著しく低下している。また、気力の落ち込みも激しく、11 カ国で比較される「世界青年意識調査」では、日本の青年の無気力ぶりが浮きぼりとなった。

次の世代は、「疲れている 30・40 代」と位置づけられ、その総体的現象は、身体と精神の疲労にある。社会の変動が家庭にも影響を及ぼし、豊かさを享受したにも関わらず、人間の心が豊かになったという実感がもてない状況にある。この世代の死因トップは、「自殺」である。そして、高齢者においては、「生きがいの喪失」が問題視されている。

また、全ての世代に運動不足病として「行動力の低下」「防衛体力の低下」「肥満」「情緒不安定」「不定愁訴」が拡大している。日本の社会は、前述したように豊かさを求める時代から豊かさを享受する時代へと変化している。この移行期が 21 世紀であり、地球環境の破壊と同時進行していると思われる人間破壊を阻止するのも、21 世紀の大きな課題である。

そこで、今回は「ストレス」に注目してみた。ストレス発散の実際として、非日常的時間の確保が挙げられる。例えば旅行、スポーツ、自然と触れ合う、芸術に触れる、旬のものを食するなどがある。そして、違う環境でのコミュニティの会話を楽しみ、心の言葉の発散を行うことが重要である。

ストレスとは、ゴムボールをへこませた時に生じる一種の緊張状態を示し、その要因の大部分は、人間関係にあるとされている。人間関係を構築するコミュニケーションにおいて「認知の歪みによる受け止め方」がストレスの要因の一つであり、知らずしらずのうちに、固定観念に囚われ、心的ダメージの強い状況をつくりあげてしまう。そこで、固定概念を打破することが、心の扉を開ける第一歩となる。

過度なストレス状態は、脳が精神疲労をおこし意欲を減退させる。いわゆる、メンタルダウンを起こしている。メンタルダウンの原因は、脳の疲労なので深刻にならず、前向きな対処をしていくように取り組むことが求められる。ストレスの対応には、悲観する、楽観する、気を紛らわす、逃避する、感情を押さえる、アクションをおこす、などがあるが、苦しんでいる人に対するメンタルサポートをすることが重要となる。そして、自分に対するコーチングマインドが身につけば、これらのことを解決に導ける。そこで、その一助となるセルフコーチングを活用することを勧める。

セルフコーチングの１つには、日常生活における簡単な目標設定を行い、それをクリアすることで自己を見直し、高めていくことを繰り返し行っていくという手法がある。そうすることで、自己発見と自信が芽生え、ポジティブシンキングへと変化していくのである。そして、今よりもっと楽しく生きることが可能となり、大きな課題にチャレンジする意欲が沸き、人生を充実させることができると考えられる。

また、毎朝約３分間で今日の理想的な自分の姿・過ごし方を手帳に思い描いてみることを勧める。例えば、どのような気持ちで今日を過ごしたいのかなど、自分磨きのための学び項目をリストアップする。プライベートや仕事の優先順位をつける。体力、集中力の高い午前中にどの仕事を優先するかなど、効率的な１日のプログラムを組み立てる。そして、そのプログラムが、休養・睡眠時間の確保ができているかをチェックする。

大切なのは「夢」「プライベート」「休養」「仕事」にあてるバランスであり、どこかに偏りがあると、満足感・充足感が薄れる。最後に笑える人生を送るために、自分の方向性、十年先、二十年先の自分を見据えることを心掛ける。それが、今はみえなくても、元気な「こころ」を失わないために、自分の身体に対する問いかけから始めることが、納得のいく人生を送れることに繋がると考えられる。

平成 22 年 11 月 15 日
縦縞の長裙と男装の麗人　ー高松塚の人物群像をめぐってー

文学部歴史文化学科 教授　山本 忠尚

1．高松塚古墳の発見と人物群像の構成

1972 年 3 月 21 日発見。4 人一組で東壁に 2 群、西壁に 2 群、計 4 群 16 人があらわされている。中央の青龍あるいは白虎を挟んで、入口のある南に男性、北に女性を配置する。

先行研究はいずれも、令（りょう）の規定と合致するか否かの視点からおこなっている。人物たちが侍者であることに気づいていない。出行（しゅっこう）図であるとする説が多いが、疑問。

中国の壁画や俑（よう）（人形）と比較する。唐では公服と常服を区別した。

2．女性群像

女性の衣裳は、色は変わるが、基本的に同じデザイン。膝下くらいまである長い上衣と裾が地にふれそうな長裙（くん）（スカート）である。頭は結髪。8 人のうち 6 人の顔が斜め 45 度の方を向く。

翳（さしば）（柄の長い団扇）、払子（ほっす）、如意（にょい）を持つ。履物は高頭履。

縦縞の長裙を身につけた壁画及び俑を表にとりまとめた。その結果は、拙著『高松塚・キトラ古墳の謎』（吉川弘文館）をご覧いただきたい。

3．男性群像

男性の服装も女性とほぼ同じであるが、裙ではなく袴（はかま）をはき、頭上に漆紗冠（しっしゃかん）、すなわち幞頭（ぼくとう）と思われるものをかぶっている。

蓋（きぬがさ）、胡床（こしょう）、毬杖（ぎっちょう）（ポロのスティック）、あるいは袋に入れた棒状の器物などを持ち、あるいは頸から四角い袋をさげる。東壁先頭の男は、蓋をさしかけられているので重要な人物とされるが、この人物は蓋の下にいるのではなく、蓋を持った別の人物のそばにいるに過ぎない。ただし、蓋は一位相当と考えてよい。

男性群像の中に、顔の表情や手指の表現などから、女性であるが男性の衣服を着用している者がいることに、薄々気づいていた。高松塚にかんする書物を執筆する過程で、再三図像を眺めているうちに、少なくとも 2 人は若い女性であることを確信するに至った。

（1）顔の輪郭－丸い、特に顎。表情－ふくよかで髭なし。仕草－手指が女性らしい。

（2）持物－他が蓋・胡床・毬杖あるいは武器らしき袋に入ったものを持つが、この 2 人は頸から四角い袋を提げる。

（3）履物－中国の壁画においては、ふつうは高頭履、あるいは黒い革靴であるのに、男装の女性は線鞋あるいは絲鞋をはく。唐初に流行した胡風と関係するか。

（4）古代日本において女性が男装した可能性はあるか。
　　性差をなくす方向－王権を示すばあい。
　　古代日本の貴族社会では、男装の女性はさほど珍しくなかった。

4．出行図と言えるか

正確には「出行鹵簿（ろぼ）」。漢から北朝にかけては壁画のほか俑をならべるばあいもあった。北朝後期になって壁画が多くなる。侍衛・儀仗出行・列戟で構成するのが原則だが、狩猟や打馬球・客使図を描くこともある。儀仗出行には歩行と騎馬の二種がある。列戟は身分によって戟数を違える。

女性が表現されているのは室内かあるいは邸内に相当。外には出ていないのであって、出行図には現れない。逆に、邸内に男性がいることは稀。内侍は去勢されている。

むすび

１．縦縞の長裙は７世紀後半のファッションであった

２．男性群像の中に男装した若い女性が含まれている

３．人物群像は出行図ではない（邸内の様子）

表　代表的な壁画墓と俑

墓　主　人	陪葬	全長 m	侍女の位置	縦縞長裙	男装女性	出 行 図	列戟（東＋西）
李寿（630）		44.4	甬道	なし	なし	騎馬儀仗・狩猟	第四天井 7+7
楊温（640）	昭陵		墓室	あり / 俑	なし	なし	なし
長楽公主李麗質（643）	昭陵	48.2	甬道	不明	なし	雲中車馬・儀仗	なし
段簡璧（651）	昭陵	46.2	第３天井以内	あり	あり		第一天井 6+6
新城長公主（663）	昭陵	50.8	第２過道以内	あり	あり	儀仗・牛車	第一天井 6+6
鄭仁泰（664）	昭陵	53	第５過道以内	不明 / 俑		鞍馬・儀仗・牛車	なし
李震（665）	昭陵		第３過道以内	あり		牛車	なし
韋貴妃（666）	昭陵		第４過道以内	あり	あり	儀仗	なし
李爽（668）			甬道	あり / 俑		鞍馬・儀仗	なし
蘇定方（668）	順陵	52.5	第６過道以内			儀仗	第五天井 5+5
燕妃（671）	昭陵	不明	甬道	あり	あり	不明	なし
房陵大長公主（673）	献陵	57.8	第３過道以内				なし
李鳳（675）	献陵	63.4	甬道				なし
阿史那忠（675）	昭陵	55	第３過道以内	あり	あり	儀仗・牛車	第一天井 6+6
安元寿（684）	昭陵	60.2	第５過道以内	あり	あり	不明	なし
永泰公主李仙蕙（706）	乾陵	87.5	前甬道以内	なし	あり	儀仗	墓道 6+6
懿徳太子李重潤（706）	乾陵	100.8	第３過道以内	なし		儀仗・狩猟・馬車・駱車	第一天井 12+13 第二天井 12+12
章懐太子李賢（706）	乾陵	71	第４過道以内	なし	あり	狩猟・儀仗・客使	第２過道 7+7
韋浩（708）		41.5	前甬道			狩猟	なし
韋⊠（いこう）（708）		34.9	後室		あり		なし
節愍（せつびん）太子 李重俊（710）	定陵	54.3	第２過道以内	あり / 俑	あり	儀仗・打馬球	なし

【参考文献】（主要なもののみ、刊行年代順）

秋山光和「高松塚古墳の壁画－画面構成とその絵画史的意義－」末永雅雄・井上光貞編『高松塚古墳と飛鳥』　中央公論社、1972

原田淑人「古代の人物像の服飾－高松塚人物像の理解のために」同上

義江彰夫「壁画人物像からみた高松塚古墳の被葬者」同上

石田尚豊「高松塚古墳壁画考」Museum 263・264、1973

猪熊兼勝「衣服」『万葉乃衣食住』飛鳥資料館図録 第 17 冊、1987

斉東方・張静「唐墓壁画與高松塚古墳壁画的比較研究」『唐研究』第 1 巻、1995

佐原真「高松塚壁画人物像の服装」『高松塚壁画の新研究』飛鳥資料館

武田佐知子『衣服で読み直す日本史　男装と王権』朝日選書 601

李星明『唐代墓室壁画研究』陝西人民美術出版社、2005

来村多加史『高松塚とキトラ　古墳壁画の謎』講談社、2008

山本忠尚『高松塚・キトラ古墳の謎』歴史文化ライブラリー 306　吉川弘文館、2010

平成 22 年 7 月 17 日
スポーツとストレス　やる気を促すコーチング

体育学部体育学科 准教授　村上 佳司

一般的には、日ごろのストレスを発散させるためにスポーツに取り組み、爽やかな汗を流して心をリフレッシュすることで、明日への活力を養うと言われています。一方で、スポーツ選手は、様々な悩みを抱え競技に向き合っています。「記録が伸びない」「結果が出ない」等、自らにプレッシャーがかかり、これが大きなストレスとなり、選手自身に覆いかぶさってきます。そこで、最近これらの「ストレス」を軽減して、プラス思考に転じられるための「コーチング」が大きく注目されています。

「コーチング」とは、人材開発のための技法のひとつで「コーチ」（COACH）とは馬車を意味します。馬車が、人を目的地に運ぶことから「コーチングを受ける人（クライアント）を目標に導く人」を指すようになりました。歴史的には、新しいものですが、よく知られているケースとしては、スポーツ選手への指導があります。しかし、それだけではなく、現在では交流分析などの手法を取り入れて、ビジネスや個人の目標達成の援助にも応用されています。それは、指導の場面において、一方的に相手に知識を教え込むのではなく、ともに考え相手の可能性を引き出す方法を意味します。

特にこの分野の先進国アメリカにおいては、「コーチング」は、ビジネス面においても、必須のものとなり、現在社会の根底を支えるコミュニケーション法と考えられます。一方で、様々な場面の中で、たった一人との出会いが、コミュニケーションを通じて人生を大きく変えることに繋がることもあります。このことから、コーチングは、ただの技法だけでなく、文化として捉えることができると考えられます。

次にストレスは、心的要因との関わりが強く、現代社会は、様々な場面において、多様なストレスが存在しています。そこで、具体的に自分がどのようにストレスを感じているか、またどのような方法で発想の転換を行えるか、自分自身の心的状況を認識する必要があります。そのためには、自分自身の心的状況の変化に気づくための自己チェックを行います。そうすることで、コミュニケーションにおける他者の言葉を自分に都合よく聞いてしまう、または、変換してしまうといった自分の考えを通過させてしまう「認知の歪み」というものを認識することができます。この「認知の歪み」が心的状況に悪影響をおよぼしストレスが生じます。そこで、そのストレスを取り除き、心を鍛えるコーチングが、様々な場面で注目されています。

一方、ストレスには「よいストレス」というものも存在します。適度な圧力は、人間を成長させます。生きているかぎり、ストレス・ゼロはありえません。マイナスのストレスに気をとられるより、プラスのストレスで自分を成長させることが重要となってきます。

「認知の歪み」から生じるストレス、職場・子育て・教育の場など自分自身に行き詰ったものを感じているのであれば、物事の角度を変えて分析することが求められます。そのためには、自分を見つめ直すことが重要となり、このことを「セルフコーチング」と言います。

人生を充実させて生きている人は、全てセルフコーチングの達人といえます。セルフコーチングを活用することで、理想的な状態を手に入れようと努力し、自分からやる気を引き出し、人生の一層の充実を目指して前進するよう自分自身を力づけることができます。

その取り組みとして、まず、自分が今成し遂げたいと思っていることを、深く考えずに数多く書き出します。そして、自分が容易に成し遂げられそうなものから目標を定めます。目標を立て、達成のために努力するとき、人は成長することができます。どんなに小さい目標であっても、それを克服して達成することで必ず成長があり自信に繋がっていくのです。このことから目標は、自分育成の道しるべとなり、この繰り返しが心の自信を積み上げていき、ストレスに対処できる自分づくりに結び付きます。

自分の夢を持つことは、ストレスを軽くします。そして、セルフコーチングを活用し最後に笑える人生を目指して、変化の激しい社会を生き抜く術を身につけることが重要であると考えます。

平成 22 年 7 月 17 日
健康的な生活に向けた生涯スポーツへの参加

体育学部体育学科 講師　備前 嘉文

本講座では、日常生活によっておこるさまざまなストレスを解消し、充実した日常生活や余暇を過ごすために、「スポーツへの参加」をテーマとし、スポーツに対する考え方やさまざまな生涯スポーツの紹介、また生涯スポーツの普及に対する自治体の取り組みを中心にお話ししました。

まず、スポーツに対する考え方についてお話しする前に、「なぜ、私たちの日常生活においてストレスが生じるのか？」について、その原因を探るところからスタートしました。その中で、私たちは日常生活の多くの場面で、知らずしらずのうちに「固定観念」に囚われていることがわかります。その例として、じゃんけんの例があります。アクティビティーとして、講演者とじゃんけんをおこない、参加者の方には講演者が出した後に、わざと負けるように出してもらいました。じゃんけんをする時、大抵の場合、わたしたちは勝つことを求めます。日頃、負けることを目的にじゃんけんをすることには慣れていないので、参加者の方は後出しにも関わらず、出す手について迷っていました。私たちがじゃんけんをおこなう場合、何らかの優劣を決める手段として用いることが多いので、勝ちを目指すことは当然なのですが、「じゃんけん＝勝たなくてはならない」という固定観念が定着していることを表しています。

このじゃんけんと同様に、スポーツにおいても、多くの方が「勝たなくてはいけない」という固定観念を昔から持っているのではないでしょうか。確かに競技スポーツをおこなうアスリートにとって「勝つ」ことは最大の目的であります。しかし、Sport（スポーツ）の語源が「休養」や「気晴らし」を意味する deportare であるように、本来スポーツは「娯楽」や「レジャー」として楽しみを求めるものであるのです。我々は、「スポーツ＝勝たなくてはならない」という固定観念に囚われて、多くの人が楽しむことを忘れてしまっているのではないかということをお話ししました。

その結果、青少年においても「スポーツ＝苦しい、しんどい…」といったイメージが定着し、スポーツ離れに繋がっていることが予想されます。しかし、スポーツは「勝つこと」だけが目的ではなく、楽しむことによって生活の質を向上させるものであってもよいはずです。楽しむことを目的とするスポーツ、それが生涯スポーツなのです。生涯スポーツについては、日本においても、文部科学省によって出された「スポーツ振興基本計画」の中で、「国際競技力の向上」と「スポーツを通じた子どもの体力の向上」とともに、「生涯スポーツ社会の実現に向けた、スポーツ環境の整備」として示されています。

わが国における成人のスポーツ参加率は、欧米の国に比べまだまだ低い数字であることもデータを用いてお話ししました。生駒市が実施した調査においても、週１回以上定期的に運動をおこなっている人の割合が 40.8% と、国がめざす水準に達していません。この問題を解消するために、国や各自治体では、これまで日本のスポーツを支えてきた学校スポーツから、学校という枠にとらわれない地域に根ざしたスポーツクラブにスポーツ振興の拠点をシフトしている動きについても紹介させていただきました。また、今回の講座では、人と人の結びつきを深めるなど、スポーツが地域に密着して実施されることにより期待される効果についてもお話しさせていただきました。

天理大学公開講座

第６号

（2009年度／2010年度）

2011年８月発行

編集発行　天理大学広報委員会

学校法人天理大学広報部

印刷　天理時報社

天理大学広報委員会・学校法人天理大学広報部